
Muv-Luv -3rd story- **世界への介入者**

Oka Nieba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v - 3 r d s t o r y - 世界への介入者

【Nコード】

N 4 2 6 8 W

【作者名】

O k a N i e b a

【あらすじ】

天地無用！に転生したオリ主がある事件をきっかけにM u v - L u vの世界に飛ばされます。

なぜM u v - L u vの世界ではナチス・ドイツが強かったのか。どのようにして世界は構築されたのか。

オルタネイティヴ計画とは何のための計画なのか。独自解釈モノですので、お気をつけください。

また、武は出ますが、あまり対応がよくありません。マブラブ主要キャラ等が消される可能性があります。

恋愛要素は…低めになりそうです…。

世界背景：天地無用！、舞台：マブラヴ、設定：アウターガンダム、フルメタル・パニック、Dies irae、パトレイバー、Healing

第0話・三命の頂神達の画策（前書き）

こんにちは。

初投稿になります。

よろしく願います。

11/3 訪希深の発言「姉者」 「姉さま」に変更いたしました。

第0話・三命の頂神達の画策

ここは三命の頂神が張った結界内。

誰にも干渉される事は無いこの中で、一人の男の処遇について話し合っていた。

姉さま、
には我が管理する世界に行ってもらうが構わぬな？

その次元はどうなっているんだい？

なに、”所詮”は研究目的に創った世界。
が潰しても一向に構わぬぞ。

はあく。あたしは”そんなこと”聞いてるんじゃないだよ。
また”Z”みたいのが出てこられても困るって事を言ってるんだ！！

今回は 成長させるのが目的なんだよ！
そもそも今回の件だってあんたが変なちよっかいを出さなきゃこんな事には…

わ、わかった姉さま！わかったから注射器を下げてください！！
が死ぬような所ではない！地球人のいる世界だから大丈夫だ！

本気を出さなくても大丈夫…

というよりも姉さまだって遊んでいたくせに、なぜ我だけが悪いのだ！

訪希深、あんたのはやり過ぎなんだよ！
やり方ってものが…

んんっ！…お戯れはそこまでにしませんか？

瀬戸殿も　ちゃんも我々を待っているのですから。

訪希深の世界も”さほど悪く”ありませんでしたよ。

…津名魅が言うんなら大丈夫だね。

じゃあそこに行ってもらおうかい。あたしは　に説明するか

ら瀬戸殿は頼むよ。

解りました、鷺羽姉さん。

あと、お願いが一つ…

ん？珍しいね？どうしたんだい？

訪希深の世界が終わったらその…

私の世界に　ちゃんを入りたいのです…

まあ、裁量はあたし達に任せられてるからいいんじゃないのか
い？

でも何でさ？

そ、それはその時にお話しさせていただきますので！

ちゃんによるしく伝えといてください！

それではお先に！

ああ…

不思議に思いつつも驚羽もその場を後にする。むくれている訪希深
を置いて…

第0話・三命の頂神達の画策（後書き）

…

読みづらい。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（前書き）

天地無用！GXPはアニメ版の知識しかありません。
また真備清音さんだけは登場しますのであしからず。
このへんは独自解釈です。
それではどうぞ。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹

第二世代艦「水鏡」のメインブリッジ。ここは今、暗い空気しか立ちこめていない。

所以は、第三聖衛艦隊司令補佐官の無期限退職命令である。樹雷の裏の最高権力者であり、水鏡のマスターである神木瀬戸樹雷の判断は間違っていない。実際、退職命令というのは人材流出を防ぐ一種の手段である。ただ”無期限”という言葉が彼女の部下達の心に引っかかっているのだ。

「瀬戸様：どうにかならないのでしょうか？」

この男、平田兼光は神木家第七聖衛艦隊司令官にして「瀬戸の剣」と呼ばれる豪傑である。

それほどの逸材が、今回の判断は非の打ち所がないという事実を受け止めながらも、この空気に耐えきれず皆を代表して言った。

「だからねえ、これは決定事項なの。」

わかっているでしょ？いくら何でも今回は隠しきれぬ事じゃない。

私だって命令したくないわこんな事。それに、津名魅様の御言葉も頂いてるわ。

まあ……確かに気持ちはわかるわよ。

結果はどうあれ水穂、林檎達を助けたのですもの……」

あっ！そこは地雷！

聞き耳を立てていた部下達は恐る恐る二人を見る。

柁木水穂、神木家第三艦隊司令官兼情報部副官にして「瀬戸の盾」

と呼ばれる聡明な女性である。
そんな”彼女の”補佐官が自分のせいで今まさに裁かれようとして
いる。

否、裁かれた。

そう、これは決定事項。決して覆る事のないもの。
休職命令だけなら良かった。いつでも会えるから。

だが、彼女そして補佐官に近い者だけが知っている彼の本当の処遇。
三命の頂神によって異世界に彼が送られる、つまりは島流しなのだ。
しかも”無期限”の。
心中穏やかでは無いのは当たり前だ。

それは林檎も同じであった。

立木林檎、瀬戸配下の経理部主任にして「経理の鬼姫」と呼ばれる
理知的な女性である。

二人とも俯いたまま何も言わない。
下唇を咬え、言葉を出すのを必死にこらえている。
耐えるように体は小刻みに震えている。

「はあゝ。ヤダヤダ。

この重い空気をどうにか出来ないかしら？

仕事が進まないじゃない。

三日よ三日。何時まで引きずってるのよ。」

瀬戸はあきれたように扇子を広げたまま上に上げ、彼女たちを挑発
する。

それでも動かない。何も言い返さない。ビクつく部下達。
悪循環である。

流石の瀬戸もしびれを切らし扇子を力強く閉じた。
それと同時にとてつもないプレッシャーが当てられる。

「水穂ツ！林檎ツ！ふざけるんじゃないわよ！

あんた達がそんなのでどうするの！！」

「「「うっ…」」」

樹雷の鬼姫ここにあり。この闘気を流せる者など、ここにはいない。

「大体あんた達そんなことで彼が喜ぶの！？」

まるで彼が死んだみたいじゃないか…と思いつつも言う。
だが彼女らは未だに俯いている。

「「すみません…」」

それしか言い返せなかった。
そしてそのままブリッジを後にする。

「待ちなさい！話はまだっ…」

…っは。どうすりゃいいってのよ。私は。

私だって引きこもりたいわよ。

でも…と思った所で秘匿通信が入る。

彼女もブリッジを去り自室で回線を開く。

相手は白眉鷲羽だった。

「大変そうね、そっちも」

「と言うことはそちらでも？驚羽”殿”」

「まあ…ね。」

と、苦々しく返答する驚羽。

柁木家も同じ空気。二人とも大きいため息を吐く。

「あの子は無事に飛ばせたよ。」

不意に本来の用件を伝える。すると瀬戸は遠い目をしてつぶやくように話す。

「そうですか…早く帰って来てくれる事を願いますわ。私の為にも。」

「大丈夫。きっと立派に成長してきてくれる。私たちが育てたんだからさ。」

「では私たちも…という激励ですか？」

ふふっ…と手を口に当て上品に瀬戸は笑う。
そう、それしか無いのだ。

「水穂殿と林檎殿は津名魅に任せたから、大丈夫。」

「あら、それは助かりますわ。此方も打つ手なしで困っていたのですよ。」

時に、真備清音殿は？」

「それも津名魅。あの子が打つ手は良さそうよ。」

ふっふっふっ…打って変わってマッドな笑いをする鷺羽。
それもこれも彼が一つ目の世界を終わらせてからだけど、一言付
け加えた。

瀬戸にとつては不安材料でしかないがこれも計画の為、仕方がない
と相づちを打って答えた。

二人とも心なしか顔色が良い。

「それでは瀬戸殿。」

「それじゃあね、鷺羽”ちゃん”。」

二人は英気？を養い通信を切ったのであった。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（後書き）

うん。

本編行かないなあ…

と言つより瀬戸様のキャラが難しい。

オリ主の細かい設定は存在しているのですが…
これは小出しか、もしくは別の機会に。

第2話：ズレた感情（前書き）

まだまだ影の薄いオリ主…

1 / 3 訪希深の発言「姉者」 「姉さま」に変更いたしました。

第2話：ズレた感情

榎木家の一畳程度の広さの物置だったその部屋は今、ある女性の研究室と繋がっている。

この部屋は…いや、一つのスペースコロニー…

否、星々の集まりが、彼女の研究所と化している。

2012年12月25日現在、地球上でこんな技術を有しているのはただ一人。

何を隠そう、彼女は宇宙一の天才科学者、白眉鷲羽とはこの方であるッ…

てってれ〜

ムフツ、ムフフフフ…と自画自賛しているのもまた彼女ただ一人である。

そしてそれが事実なのも確かである。

彼女は今、そんな広大な研究所のとある一角へ向かっている。

そこは白眉鷲羽が認めた、最初で最後の弟子に預けた研究室である。

彼は本当に不思議な子だった。

この天才がいくら調べても、摩訶不思議の言葉しか出てこないのだ。

長神の力を持つてしてもなにも解らない。

もはや解析不能、というのは少し語弊がある。

わかっていることは”長神の力を受け付けない”という事。

つまり彼が存在している次元は巻き戻すことが出来ないのだ。

そして、彼が存在している次元はここしかない。

よって導き出せる答えは…

つと、そんな物思いに耽っている間に部屋の前に着く。

「んんっ…」

これから彼を別の次元へ飛ばすのだ。

あの事を引きずってなければいいのだけど…

と思いつつノックを四回打つ。

案の定返事がない。

やれやれ…と首を振りつつ、しっつれいするよ〜と言いながらドアを開ける。

そこにいたのは、地球で言う眉間に指を当てた「考える人」だった。

「ひつどい顔してるじゃないの、あんた。」

怪訝な顔で鷺羽は一人の男の顔を覗く。

すると、完全に瞳孔の開いた深紅の眼差しで見つめてくる。

「私の…罰は決まりましたか…鷺羽様…」

ああ…台無しじゃないかその顔は。

鷹のような鋭い眼光。女性のように整ったその容姿。

「いつものように『マッド』とは呼んでくれないのね。

まあいいわ。

あなたは、まず始めに訪希深の管理する世界に行ってもらおう。」

「それだけでしょうか…。」

「んにゃ、それプラス訪希深と”契約”をしてもらおうよ。」

一瞬彼の肩が跳ねたような感じがした。
そして何処からかポンツと音を立てて、可愛らしい訪希深が現れた。
それに何も反応せず彼は尋ねる。

「して、その契約とは？」

「八つある。」

1 約束の日を地球上における敵対地球外生命体を駆逐した日と定める。

2 この日まで戦い続けなければならない。

3 この日まで力を解放してはならない。

4 この日まで決して逃げたり死んではならない。

5 人類に一人だけ自らの主を定め、この者を守護する事。

6 約束の日が訪れたとき第5の契約は破棄される。

7 これが行われた時、火星を奪還する事。

8 これが行われた時、訪希深との契約は解消される。

以上だ。

わ、我としては を送りたくないのだがなっ…

姉さまがどうしてもと言うから仕方なく…」

と、頬を赤らめ自分の人差し指を付けたり離したりしている。

「あゝあゝ ああ！」

もう！あんたはしばらく黙ってなさい！！」

本当にやつかいな子だ。

”Z”の一件以来、訪希深は妙に余所余所しくなっていけない。

「はあ、それで飲んでくれるかいな？」

「飲むも何も。」

無感情にただ従うだけ。

彼には今何を言っても変わらない。

それなら事を進めて帰ってくるのを待つのが正解だ。

「ん、じゃあ飛んでもらうよ。

訪希深、頼んだよ！」

「それでは 行くぞ!!！」

ずるずるとピクニックに行くように彼を連れて行く訪希深。

はてさて はどんな風に帰ってくるだろうか。

瀬戸殿にも報告しなきゃね。

マッドな笑いをしつつ一つの書類を手にとる。

そこには ハイパー改造計画Ver.4と書かれていた。

第2話：ズレた感情（後書き）

オリ主スペック

黒髪、長髪、後ろ縛り。

目は深紅、鷹のようなツリ目。

Helldivisionアーカード青年Verか、ウォルター少年という感じで。

このままでは恐ろしいので、細めの眼鏡を掛けてインテリっぽくなってます。

普通に見れば美青年です。

眼鏡を掛けると目が黒く見える不思議…

体は鷺羽特製ナノマシンで廻り以上の回復力。

つまり…不老長寿？

鷺羽が出来る事は基本彼も出来ます。

スタイルは…暗躍系

つまりウォルターみたいな糸でバツバツ裂いて、Gガンシユバルツのゲルマン忍法使って、柁木遙照樹雷みたいな武術家…。

三人を割って強化した感じです。

ちなみに2012年12月22日時点で皇家の樹のバックアップ無しで光鷹翼六枚発現させてます。

不吉な日ですね…。

まあ、その辺の能力はこの話で制限された事になってます。

また、今の訪希深はすっかりさんなので予定とちよつとずれた事をします。

そして、連れて行くという表現ですが実際はアストラル投射していません。

次でプロローグ終わらせる予定です。

第3話・もう一つの契約（前書き）

この後の展開を考えていくと難しいです。
これでプロローグは終わります。

第3話：もう一つの契約

「この場所…」

その場所は、得体の知れない植物が辺り一面に茂っている。少し歩みを進めると、どこか懐かしい雰囲気の漂う巨木が佇んでいた。

高さにして約100メートル、幅約6メートル。

彼はこの樹を知っている。でも知らない。そんな樹。

幹の前で止まる。そして樹に触れる。

流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる
ナニカが流れ込んでくる。

目眩がする。

頭が割れそうだ。

落ちる。

落下する。

「ああ…アンタの言うとおりになったよ。」

誰に話しかけているのだろうか？

彼は闇の中を落ち続けているだけなのに。

「アンタの契約…たった一つの契約…あんな簡単な契約がこんな結果になるなんて…」

本当に地獄になった。」

彼の目には零れんばかりの涙があふれている。

「なあ、まだ終わらないのか？まだ終わらせてくれないのか？」

返事は帰ってこない。

「まだなのか…」

ナニカに納得し目をつむる。

それと同時に彼は気を失った。

第3話・もう一つの契約（後書き）

はいっ！

意味不明ですね！

許してください…

あと、タイトルが3rd storyになっていますが、武の三回目のループという意味ではありませんのであしからず。
本編行きます。

第1話：五撰家に生まれし鬼（前書き）

パトレイバーキャラが入ります。

また、これはフィクションです。

登場するキャラクターは実在する人物とは関係ありません。

歴史も都合の良いように改変されていますので、注意してください。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

11 / 11

読みやすいように文章を改良。

第1話：五撰家に産まれし鬼

目が覚めたら誰かと話していた。話の内容は覚えていない。でも、とても悔しくて…そんな感情だけはぼんやりと覚えている。そして最後にこう言うのだ。

「…に会って真に…める。…方が…しろい。」

よく見る夢の一つだ。

私は、曙計画の合同先行調査報告書を会社のオフィスで読んでいる。その枚数、約1000枚。しかも、両面刷りだ。

これを見たとき、辞書かと思ってしまったが、我が日本国が戦術機を造るためには必要な道筋。

よって、こめかみを抑えつつも読んでいく。ざっと読んだ限り、このような内容だった。

『F-4の基本性能は対BETAには有効であると判断出来る。

しかし、我が国の資源保有量は依然低く、十分な弾薬の補給は困難であり、米国の戦術は日本のそれには適合しかねる。

故に日本独自の機動性、近接戦闘に特化した戦術機の開発が急務である。』

…なんというかやる気を無くす内容だった。

そんな当たり前の報告をする暇があるなら米国の戦術機の情報を一

つでも多く盗んで来て欲しい。
なんのために研究費用を投資したのかわからない。

私の名前は天木^{アマキ}一貴^{カズキ}。歳は2歳。

天木という苗字はあまり好きではない。

なんかこう、前世では相性が悪かったのではないかと言った類だ。
それにこれは本名ではない。

元々、私は崇宰家で生まれた人間だ。

崇宰家は、五摂家の一角で格式高い名家であり、日本を統治している家系と言っても過言ではない。

では、なぜそんな家から出て天木を名乗るのか。

そんな疑問は簡単に解決される。

私の眼を見たまえ。

深紅に染まっている。

これが一番の問題なのだ。

そして困ったことに私は洋風の顔立ちをしていて、犬歯が普通の人

間より尖っており、かつ生まれながらにして日本語がきちんと話せ、書けた。

実の母親と私はすぐさま遺伝子検査。

結果は白。純日本人だった。

しかし、五撰家の一つ、崇宰家に「鬼」が産まれたとなつてはこの戦時下問題らしい。

そつゆう訳で崇宰家の”元”家臣であつた天木家にお世話になるととなつた。

私が言える事ではないが、この天木家、私を養子として引き受けた”変態”である。

現天木家当主、アマキ ジュウザブロー天木重三郎、この人がその元凶。

彼は元帝国斯衛軍少将。

現在は天木重工業、天木商会の代表取締役、兼、社長。

現役時代、国内国外問わず「斯衛軍一のキレ者にしてクセ者」と言われていた。

事の発端は習志野俘虜収容所での捕虜の扱いである。

当時の軍関係者などの反対を押し切り、故西郷寅太郎大佐を強力に支援しドイツ人捕虜を手厚く保護した。

噂では、この行為にヴィルヘルム2世はいたく感動し、亡命中であつたにも係わらず非公式ながらプール・ル・メリット勲章を贈つたとされている。（後の平和章の原案とされる事になる）

これが元でフリードリヒ・ハックラを中心としたグループと深い親

交を持ち、天木重工業、天木商会の前身ドイツ科学研究所を設立。この研究所を通し日本の近代化に大きく後押しした。

余談ではあるが、ドイツ国内では「日本＝重三郎」という図式が一般に認知されており慕われている。

さらに、彼のこういった功績は皇帝陛下、皇武院家等のごく僅かな有力者には高く評価されている。

第二次世界大戦ではドイツとの交渉窓口は彼であり、航空機や小火器などの兵器は彼の長男を筆頭として日本に還元していた。しかし米国の原爆に巻き込まれ長男は死亡。

こういった理由からドイツ軍人・研究者らの亡命を強力に手引きしたとされている。

敗戦後は、病弱だった彼の三男がその商才でもって会社を大きくした。

彼は独国とのパイプを生かし小火器、弾薬を中心に開発、販売。世界シェア10%を越えるという快挙を成し遂げ、日本国内では40%は優に越える日本兵器産業の草分け的存在となった。

また長男の死亡、次男はミッドウェー海戦で死亡していたため、彼、^{アマキ ユウジ}天木祐司が天木家当主となり、慣例として斯衛軍に技術将校として入隊した。

ただ、1968年には肺結核を患い死亡している。

又3人は妻を貰っていたものの子に恵まれず跡取りは誰一人いなかった。

故に重三郎が当主に戻り、会社の経営をしているのである。

彼は77歳という高齢であるため、子を得る為にはいささか無理がある。

さらに言うなら彼の妻もすでにこの世には居らず、彼自身も新たな嫁を貰うつもりが無い。

なぜなら、彼は多くの武家に嫌われているからである。

武家というのは商いをしてはならないという仕来りが存在しており、またドイツとの親密さからナチスのシンパ、若しくはドイツのスパイという噂が絶えず宗宰家からも敬遠されている。

彼は退役しているとはいえ「赤」を司る斯衛である。

これは武家社会において、かなりの高い地位を表す。

頂点を「紫」、「青」、「赤」、「黄」、「白」、「黒」とし、赤は3番目にあたる。

それ故に、世間からの風当たりも強い。

自分の苦勞を子にかける必要は無いし、会社も別の人物に任せればいいという考えをした。

ここで、私の存在である。

産まれながらにして鬼とされ、存在を消されようとしていたときに彼は私を引き取った。

あれから2年しかたっていないが、今でも覚えている。彼は私にこう言った。

「修羅の道を歩む心意気はあるかの？」

まったく、この”じじい”は0歳の餓鬼にとんでもないこと聞いて来やがった。

普通、0歳の餓鬼にはそんなことを聞くはず無い。

つまり、彼は私の”異常性”を認め、それを肯定した上でのこの質問だ。

私は、私の自身の運命を切り開く事を決意し「是」と答えた。

本当のところ、母親や父親に止めて欲しかったが、それはなかった。そして、武術に始まり経営学やらなんやら様々な知識を与えられた。お陰で今や、じじいのバツクに付き、事実上会社の運営は私がやっている。

そして一つの計画を練っているのだが…

「入るぞ、坊主。」

「ノックしてから入室してくださいよ…」

物思いに耽っていた私は突然の来訪に驚きもせず、眼鏡を外しながら振り返る。

この男は、榊 清太郎、帝国陸軍技術軍曹。

天木重工業の技術部出身。
亡き祐司さんの親友であり、一般人で唯一、彼にタメ口で話していた男だ。

戦術機が発表された後「こいつあ男のロマンだ」と訳のわからないことを口走り、天木重工業、部長のポストを蹴って帝国陸軍技術廠へ行った猛者でもある。

昔のよしみということ、今回、軍から我が社に出向してもらい、曙計画に行ってもらった。

「ん。」

500枚程度のまとめられた書類をぶつきらぼくに渡す。
それを私が受け取ると、自分専用のマグカップに珈琲を入れてソファーに座り込む。

表紙には”極秘””部外秘””転記禁止”などと真っ赤に染まっている。

題は「戦術機の管制ユニット及びシステムのリバースエンジニアリング報告」。

先ほどの合同先行調査報告書とは違い、数枚めくるだけでもこの報告書の濃さが伝わってくる。

ため息をしつつ書類を閉じ机に置く。

これは直ぐに読めるような内容ではない。

「流石ですね、おじさん。」

「あいな、坊主。

俺は仕事でそれをやっているんだ。

それにお前さんに流石だなんて言われる筋合いは無い。

俺にとっちゃ当然の内容だ。」

だから他の連中が出来てないから…と言おうと思ったが私はまだ2歳。

こんな餓鬼に褒められるのは屈辱であろう。

「わかりました。お仕事ご苦労様でした。」

「それでいいんだよ。

俺は技術部に戻ってそいつの内容説明してくるわ。」

彼はそのまま膝を強く叩き、立ち上がる。

んじゃあな、とドアノブに手をかけつつ背を向けながら片手をあげて退室する。

そして、私は眼鏡をかけ直し書類に手を出すのであった。

第1話：五撰家に生まれし鬼（後書き）

天木一貴

天地無用！の世界での名前とは関係ありません。

あと、彼は記憶を失ってます。

パトレイバーのおやっさん！

いいですよね〜

それでは

第2話：Phantom（前書き）

アウターガンダムの設定が入ります。

松浦まさふみさんの描く女性キャラが個人的にツボです。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木^{アマキ}一貴^{カズキ}。 歳は3歳。

正：私の名前は天木^{アマキ}一貴^{カズキ}。 歳は2歳。

第2話：Phantom

このBETAとの戦争、人類の敗北はもはや免れない状況となっている。

パレオロゴス作戦によるミンスクハイブ攻略失敗。

それによるスルグートハイブの建設。

BETAの攻撃はもはや留まるところを知らない。

いや、もしかするとこれは戦争では無いのかもしれない。

そもそも戦争とは国家の間で行われる血を血で洗う争いだ。

我々人類は、彼奴等から未だに宣戦布告を受けていない。

ということは、彼らは我々を敵と見なしていないのではないだろうか？

とある研究者がBETAの生態をアリに例えて話をしているが、疑問点がある。

彼らは”防御”しないのだ。

あらゆる場面において”侵攻”するか”攻撃を受ける”この2点だけである。

ということは守るべきものがないのではないだろうか？

アリならば女王アリや卵を守る…まあ例え話に噛み付くのもあれだが…。

つまり、母なる存在がそこには無く、一つの機械として作業しているのではないか。

そして同じ炭素系生物である人類もまた機械として認識されていると仮定する。

ともすると、彼らは一体なんの作業をしているのだろうか？

彼らは一つ一つの星を隅々まで”占領”する。
まるで掃除をするように。
いや、隅々まで何かを探しているのか…。

それを確かめる術はまだ無い。

あれから3年、榊からもたらされた情報は、天木重工業の手によってその体を成そうとしている。

「完全自立型無人機システム実証試験機(案)」
またの名を「Zephyr Phantom System」という。

純粹に、BETAを殺すためだけのものだ。

これは一貴と内海が戦術機を無人で大量投入するために考案し、実験しているシステムである。

内海とは天木重工業、戦術機課課長。

といっても神出鬼没な人間で実際の所、黒崎という部下が実質的に課を動かしているようで、課長らしいことは何もしていない。

一貴は「給料分は働いている」ということで今のところは放置しているようだ。

一貴は生まれながらにして持っている知能でもって、天木グループの利益を上げ続けている。

例えば認知心理学を使用した深層心理療法を生み出し、応用として戦術機パイロットの精神安定・高揚に寄与している。

一種の催眠・洗脳であるが、これによりBETAの殺傷率が上がっており、パイロットの生存率も上がっているのも事実だ。

他にも日本の軍事組織向けに衛士強化装備の開発・生産。

さらには管制ユニットのライセンス生産も行っている。

その延長上にあるのがこのゼファーである。

この戦争は人が行う必要はないという考えの元、出来たシステムである。

「一貴や。この者が強力してくれるそうじゃ。」

重三郎が一人のブロンドヘアの老人を連れて来た。

「初めまして、カズキ様。」

そう言っつて右手を差し出し、自己紹介を始める。

何とも、怪しい雰囲気の漂う彼の名はヴァレリアン・トリファという。

彼は重三郎が助けたナチストの一人らしく、恩返しの一つとして来日したらしい。

一貴は、様はよしてくれ、と彼に言っつたが受け付けてくれない。そのまま一貴は握手を受け、手早く自己紹介をした後問いかける。

「トリファ殿、今回の件は難しい事ですがそれでも？」

しかもじじい…もとい、重三郎の恩と言っつても私には関係ありません。」

「ええ、構いません。」

我々の教義には友を愛せよ、とありますから。

貴方も例外ではありません。

大方、重三郎様からお話を伺っています、要は秘密裏にゼファーとやらの実戦試験を行いたい、という事ですね？

それと、殿は結構ですよ。」

なぜゼファアを公開試験しないのか。

ゼファアシステムは人間が乗らない戦術機の為、G制限がかからない。

シミュレーション、つまりは架空空間での戦闘で改造型F-4に乗ったゼファアはとんでもない戦果をたたき出している。

対BETA戦シミュレーションで地上支援無し、補給状態30%、BETA出現率100%でヴォールクデータをやらせたところ、八イブ内を”単機で深度約100m”侵攻した。

このデータは開発陣を驚かせ、一貴主催で盛大な宴を施設内で行った。

誰もが人類の勝利を確信した瞬間だった。

その中で内海が酔った勢いでゼファアをMig-21と戦わせた。F-4に乗ったゼファアと日本の仮想敵国機Mig-21とのキルレシオ。

その数値0：955

これは、まだ見ぬ第3世代戦術機以上の戦闘能力である。

会場は騒然。

「戦争をさせてみましょう」という内海の提案で、試しに集団戦を行わせてみたところ、敵と味方の区別が出来ておらず動くモノ全てを破壊してしまった。

BETAより酷い、この結果を見た会場は一気に通夜と化してしま

った。
その後、改良してみたところ、一様はIFFを認識しているようだが”高脅威目標”を殲滅するために味方を犠牲にする箇所が見受けられ危険過ぎるのである。

また、それに伴い単機でのハイブ侵入も困難になってしまった。とは言っても、無人で戦闘参加できる事のメリットは高く、少しでもBETAの侵攻を押さえる為にはいち早くバトルプルーフしなければならぬ。

ちなみに、一貴の侵入深度はゼファーと同条件で約20m。そもそも、単機で侵入できる彼も彼で規格外だが…

閑話休題、一貴はトリファの言う教義、という言葉に少々疑問を持ちつつも話を続ける。

「では、トリファさんと。

どうやって手伝っていただけのですか？

このゼファーは非常にデリケートな兵器なモノで、理想的な演習場所は…。

そう、戦術機がないBETAだけの場所ですね。

そんな場所に送り届けて頂きたいのです。」

まあ無理でしょうが、と彼は内心想いつつ言った。

「…危険ですね。」

ただ、結論から申し上げますとバルト海までなら送り届けられます。」

「もしや…あれを？」

重三郎が初めて口を開く。

「はい、潜水艦を使います。」

U - b o o t X I X 型を3隻までなら用意できます。」

「貴方は正気か？」

大戦中の兵器ですよ!？」

それに人員は何処から手配するのですか!？」

一貴が声を荒げながら問う。

「人員は私が集めます。

この潜水艦は我々が亡命した時に使用した船ですから。

U - boot X I X型と言いましたが外見、内部もその時とは全く異なり、緊急用の輸送船です。

ですがご安心ください。

性能、速力や静粛性どれをとっても従来のそれを上回ります。

それと、私は正気です。

どちらかというと、貴方の正気を疑いますが？」

これには言い返せない。

そもそも無理を言ったのは一貴なのだから。

だが、妙な話である。

トリファの言う事が本当ならば、亡命したナチスは膨大な資金力と技術力を未だ保持している事となる。

しかも、今回使われる船は緊急用、通常はどんな船を使っているのだ？

…ある噂を聞いたことがある。

ナチスドイツは魔術を使っていた。

ヒトラーは魔術師に操られていたに過ぎず、黒幕は別にいる。

そして、その魔術師がBETAを呼んだと。

まさか、彼らがそれなのか？

トリファの目は真つ直ぐ一貴をとらえている。
一貴は咳払いをしつつ眼鏡の位置を戻す。

「失礼。」

では、見返りは何を？」

それを聞いたトリファは拍子抜けした顔をし、頬を引きつりあげ突然笑い出した。

「ははっ！失礼。」

流石は天木家のお方だ。

私は初めに重三郎様の恩に報いる為と申し上げたが、無償と解釈しなかったか。

結構、結構。素晴らしい。

あの時を思い出しますよ、重三郎様。」

そう心底楽しそうに重三郎に同意を求める。
そして、私の”息子”だからな、と答えていた。

「では、一貴様、1つだけお願い事を。

私の命はもうすぐついでる事でしょう。

そこで、私の息子ヴァレリア・トリファが困った時、助けてはくれませんか？」

「わかりました。その時は全身全霊を持ってお助けいたしましょう。」

「

言い終わったと同時に双方ソファから立ち上がり力強く手を握り合った。

第2話：Phantom（後書き）

U - boot XIX型

UボートXIV型の後継艦で補給用潜水艦で、リアルだと完成してなかった筈です。

マブラヴの世界ではナチス・ドイツ最強だったようなので、完成。彼らが乗る船は、もはや大戦中のモノではありません。

全長：99.3メートル

全幅：10.2メートル

浮上航行時：15.8ノット

潜航時：30ノット

主機：????

排水量：????

改造型F - 4

F - 4にしてF - 4にあらず。

外見は統一中華戦線 J - 8 殲撃8型です。

内部は”より人間に近い機動”が可能なように改良されています。

つまり、従来の戦術機に搭載されている、カーボニック・アクチエーター電磁伸縮炭素帯ではなく、電磁収縮筋（通電により伸縮する形状記憶プラスチック）を使用しています。

電磁収縮筋は内海さん考案で、榊班長も整備出来ます。

管制ユニットも独自設計で、脱出機能はありません。

基本OSは内海さんだけあって”ASURA””改”ですが、一貴がつくつてます。

なんだか話が見えてきちゃいましたね。

トリファさん、クサ過ぎですよね。

それでは

第3話：遺憾の意（前書き）

一貫が壊れます。

やっとラブラブのキャラがでます。

今回は長め……？

第3話：遺憾の意

「ごきげんよう、天木様」

「う、ごきげんよう…」

なんで俺が…小学校にはいらねえといけねーんだよつ!!!
と内心叫びながら、学校の昇降口の前で怒りの舞をしているのが、
天木一貴その人である。

この学校は、斯衛関係者が入学する初等科であり、名門中の名門と
されている。

まず、マナーの講座から始まり、茶道、華道、武道…あらゆる道を
たたき込まれる。

しかし、彼には関係ない。

もうすでに、大人の世界に踏み込んだ一人のビジネスマンであり、
重三郎に指南を直接受けた天木家の次期当主である。

実際、義務教育と言っても「一身上の都合」から通信制教育に移行
できるのがこの学校である。

それをしなかったのは、じじいこと重三郎のせいである。

ことこの始まりは1年前のF-4、Zephyr Phantom
System」の試験結果だ。

「良い結果が出ぬ場合はお前を小学校へ行かす。」

「良い結果が出た場合、おじいさまには隠居して頂きましょうか。」

潜水艦内で二人の視線に火花が散る。

その様子を見ていた潜水艦内の兵士達はため息をつきつつ、試験地の情報を集め、自らの職務を全うしていた。

兵士…。

そう、彼らの姿は兵士そのものだった。

ナチス・ドイツ時代の海軍の制服。

タンカーを使って、沖ノ鳥島の南西50km先で彼らと合流したが本当に異様だった。

我々の出迎えには全員正装をし、右手を上にする独特の敬礼をしてきた。

「Achtung!」

「」Sieg Heil!」」

いつの間にかSS（親衛隊）の制服を着込んだトリファが短く返礼をし内部に入る。

艦の運航は大尉の階級をした者が行い、一人一人の業務が階級によって決められている。

軍隊そのものだ。

一体全体こいつらは…。

「周囲に敵影無し。」

「よし、アップトリム15度、無音浮上。僚艦にも伝える。」

浮上と同時に甲板要員緊急配置。ハッチを開き輸送ヘリ発進。」

「Jawohl! Herr Kaleun!」

目的地についたようでCICが慌ただしくなる。

ヘリだと光線級にやられると思うのだが、大丈夫らしい…

ゼファアの装備は青龍偃月刀、三国志の武将、関羽が使用していたと言われる通称青龍刀。

その形を模した、高周波ブレード。

そしてA-97突撃砲を2丁装備している。

一貫達は潜水艦に設けられたゼファア専用のコントロールルームで試験場所に着くまで待機する。

すると無線が入りゼファアを”投下”したと連絡が入った。

彼らの番である。

「全システム解放。アーマープロテクト解除。

システムオールグリーンです。」

「さあ、やってくれ。

起動!ゼファアファントム!」

リトアニアに1機だけ降りた戦術機のメインモニターが赤く光り立ち上がる。

装備していた青龍刀を片手で回転させながら構える。

その先には黒い津波と化したBETAが此方へ向かってきていた。

恐れもせず、臆することもなく、ゼファアは彼奴等を切り裂いて行く。

その姿はまるで黄泉の国から舞い降りた関雲長その人に見えた。

ゼファアの通る道はBETAの屍が、うずたかく築かれていく。光線級が視界に入れば他のBETAを盾にして接近、殲滅。要塞級に出会えば刺身にしてしまう。

戦闘開始から僅か10分、無傷で戦い続けているゼファア。もはや、コンバットプルーフには十分な戦果を挙げ、一貴の勝利は間近だった。

重三郎の本心は”子供”に十分な青春を送って欲しいという親心から来たもので、戯れにあのような賭け事をしたわけではない。そして、本人はそんな”親心”を理解できるほど”大人”ではない。しかし、一貴は最初こそ意気揚々としていたものの徐々に顔色が悪くなる。

現状、冷静になって戦況を理解しているのは重三郎と彼のみだ。

「ゼファアを回収する。私の機体を出すぞ！」

一人の技術者が満面の笑みでそれを制する。

「坊ちゃんが行くほどの事ではありませんよ。」

ゼファアが片付けて簡単に帰ってこれますよ。」

BETAへのキルスコアは優に”5万體”を越えており間接部分が焼け落ちるまでに猶予が無い。

「全員目を覚ませっ！！」

BETAの数が多すぎる！5分間で5万體：ヴォールク・データの3倍だぞ！

「どう考えても異常だ！」

すでに発進準備が完了していたヘリに乗り込み、ゼファアの回収地点に急行した。

そこは、異常な光景だった。

ゼファアに群がるBETA。

ヘリや一貴が近づいても殆どが反応しない。

ゼファアのみを攻撃しているのである。

パイロットは破顔しつつもHQを呼び出す。

「HQ、こちらゼファア回収班、over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、over。」

「HQ、こちらゼファア回収班。

break、予想よりBETAが多い。いや、多すぎる。

ポイント、以外を焼き払ってくれ。break over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、了解。15分待て。out。」

15分後、回収支援の為に潜水艦からトマホーク（RGM/UGM-109D TLAM-D）が全弾発射され、周囲はクラスター爆弾により一時的にクリアになった。

それと同時に一貴は戦術機と共にヘリから降り、ゼファアの回収を開始した。

だが、BETAの攻撃はやまない。

3分も経たない内にあたりはBETAで埋め尽くされる。

一貴もそれに負けず劣らず彼奴等をさばいて行く。

まるで時が止まっているかのよう。

「クロノス1、こちら回収班。」

このままでは回収不能。対象の破棄を提案する。」

一貫のコールサインは決まっていなかったが、どうやらそれがそうらしい。

へりは上空をホバリングし続けている。

「回収班、こちらクロノス1。」

却下する。もう一度トマホークで焼き払った後、5分間もたせる。回収が可能か？」

「不可能だ。せめて15分無ければ出来ない。」

「ならば、ゼファー本体の回収はどれくらいで出来る？」

本体。

つまりはパイロットルームのみを外し回収すると言っていることである。しばしの沈黙の後通信がくる。

「こちら、回収班。」

クロノス1の機体を回収しない場合、それを含めて5分で完了する。」

「クロノス1、了解。それで構わない。」

「flash、flash、flash、こちら、HQ・All
commander。」

状況は把握している。このままであれば海岸沿いの回収が望まし

い。

座標 A D - 3 5 2 3 繰り返す、A l f a - D e l t a - 3 5 2
3を回収地点としたい。

20分後トマホークを発射する。 t h a n k y o u o u t .

「H Q、こちら回収班、了解。 o u t .」

「H Q、こちらクロノス1、了解。

管制班、ゼファアの誘導頼む。 b r e a k o v e r .」

「こちら管制班、了解。 o u t .」

結果的にはゼファアを回収することが出来た。

しかし、残念なことに改造型F - 4を2機放棄する事となっ
てしまった。

だが、一番の問題はゼファアを実戦で使用することが出来
ない、ということである。

先の作戦で海岸沿いまで後退し、ゼファアのコックピットを
一貴が引き出した。

するとB E T Aは一貴のみを狙うようになり回収どころの
話では無くなってしまったのだ。

結局、ゼファアの内部電力を破壊する事によってB E T A
の発生数を減らし事なきを得た。

「Z e p h y r P h a n t o m S y s t e m」の試験結果は以

下の通りとなった。

- 1、対BETA戦における戦闘能力は、非常に強力である。
- 2、対人戦における戦闘能力も、非常に強力である。
- 3、しかし、いずれの場合においても、戦術機自体のトータルスペックがシステムに追いついていないのが現状である。
- 4、対BETA戦において、何らかの理由によりBETAを誘引している。

以上から戦闘能力に疑いの余地を挟む所はない。

しかしながら、現在の戦術機のスペックでは対BETA戦において有効な戦略立案が出来ない。

また、BETAを誘引する理由が解明されない限り、他の部隊を危険にさらす事となる。

よって当該システムは、実戦において使用することが著しく困難だと判断される。

このような判断があったため、ゼファーは修理を終えた後、改良型F-4に換装され嚴重管理のもと動態保存となってしまうた。

と、思い出した一貴の怒りは激しさを増し、もはや能のような動きと化している。

地団駄を踏んでいるようなその足は一定のリズムを刻み、まるで何かを呼び出すかのような…

「貴様が天木一貴だな！」

ずびっ！と擬音がする勢いで指を指す、凜とした女性が二人彼の前に立ちはだかった。

先頭の女性は鬼の形相で睨めつけ、もう一人は眼鏡を掛け、後ろに佇んでいる。

「何か用かつ！今日は八日かつ！！」

「俺は今忙しいのだ！！」

主に怒りの表現で…

「私は五撰家の方々をお守りする赤を授かりし、月詠真那！」

「同じく姉の月詠真耶」

堂々と名を挙げる両者。

だが、彼は意に介さない。

「マナだが、カナだかしらねえが、俺は忙しいっていつてんだろっがあああ！」

一貴は自分でも何を言っているのか解っていない。

寝る間も惜しんで開発したゼファーが、使えないと言われたショックと、重三郎のかけに負けた悔しさをどのように発散するか考えている最中なのである。

しかし、真那と真耶もそんな彼の心情を意に介さず、一つの赤い字で書かれた封書を目の前に出し宣言する。

「「貴様に決闘を申し込む！！」」

そんな状態を見ていた野次馬達は一瞬凍り付く。

「はああああ？？？？」

馬鹿か！？このジャリ！！

この俺に果たし状を送るなんざ10年早いわ!!
その貧相なミニマムおっぱいがあの丘を越えるまで、出直して!!
いつ!!!

話はそれからだ!!!」

そして、彼の発言を聞いた真那は顔を真っ赤にし反論する。

「なにがミニマムおっぱいじゃあ!この白人野郎!!
ヤンキー魂見せてみるってんだ!!

しかも、てめえもジャリだろうが!!この餓鬼つ!!」

「んだと、このアマあ!!」

俺は白人じゃねえ!体質なんだよ、阿呆!

嘆きの壁のおっぱいがしゃべるんじゃないよ!!」

「おっぱいおっぱいと!!この、下衆め!」

「はあ?おっぱいの素晴らしさが解らんとはな!

はっ!お前は一生おぼこだ!!」

「なっなんだと!」

「やっいやっい、お・ぼ・こ!」

双方共に顔面が付きそうなくらいガンを飛ばしている。
ため息を付きつつ真那が間に入る。

「天木一貴。我らの果たし状、確かに渡したからな。」

ちよっと真那…と真那は抗議しているがずると引っ張っていく。

行き場のない怒りを抱えながら、一貴は果たし状を受け取りその場を後にするのであった。

第3話：遺憾の意（後書き）

マナさんブチ切れですね。

以降マナ、マヤはカタカナ表記にします。

なんで果たし状??次回にその説明をします。

青龍刀：薙刀にしようかと迷いましたがJ-8なんで。

なぜ殲撃8型なのか、それはラウンドモニターがカツコイイから!!
それだけの理由です。

他の機体は銃を撃ちますって感じで、あまり好きじゃありません。

また、日本刀よりも槍の方が強いと思いますし…。

これは筆者の思い込みです。

へりはナチスの新兵器で一貴達もその構造について理解していません。

中型へりで戦術機1機乗せられるスペースがあります。

それ以上は不明です。

筆者は美乳が好きです。

それでは

第4話：養父の気持ち（前書き）

早めの更新です。

養父と書いてオヤジと読みます。

今回はじじい中心です。

それではどうぞ。

第4話：養父の気持ち

校門をくぐると黒塗りのセダンが6台止まっており、周囲には強面の人間が立ち周辺を警戒している。

一貴を見つけると同時に彼を囲み車まで先導する。

「一貴様、お帰りなさいませ。」

と初老の男性がドアを開け頭を下げる。

「ご苦労。」

そう言つて車内に入り車が発進する。

ふうっ…とため息を付き隣を見ると重三郎がいた。

「げっ！じっ…」

「じっ…」

「お、おじいさま、居るならいると言つてください。びっくりしましたよ。」

「ほっほっほ。学校にいるお主にどう伝えるのじゃ？」

それよりも、いつもより車が多いことに気づかなかったのかの？」

それは…失念していた。

果たし状の事ばかり考えていたのだ。

なぜなら、一貴は初等科に入って初めて私的な会話を果たしたのが月詠マナ、カナだったから。

入学当初からあらゆる科目でトップクラスだったこと、五撰家の一部は彼の正体を知っている事、肌が白く欧米風の顔立ちをしている事：等々が災いして、彼の周りに同世代で話しかけてくる子など皆無だった。

しかも、”あの”重三郎の御曹司ともなれば風当たりも強い。

正直に言うとなんない形であれ、話しかけてくれた事に彼は嬉しく感じていた。

「いえ…その…」

と、もじもじと手に持っている封書を隠そうとする。
だが、重三郎は知っていた。

「ほっほっ。果たし状か。儂もよくやられたもんじゃ。」

「は!?!」

なんで知っているんだと言わんばかりの顔で重三郎を見る。

「どれ。見せてみよ。」

一貴が惚けている間に手元から封書を奪ってしまふ。
手をバタバタさせて奪い返そうとするが身体の差でとれない。

「なになに。」

『我が家、月詠家は代々五撰家を守護する家系なり。』

天木一貴殿は紅蓮中将に認められ、次期煌武院家当主の護衛の推薦を受けていると聞いた。

一貴殿は天木重三郎様の実子ではないと聞く。

そのような者が五摂家を守護することはまかり成らん。

我ら、月詠マヤ、マナは貴殿のような得体の知れぬ者に護衛が務まるとは考えられぬ。

故に、貴殿に決闘を申し込む。

明日の放課後、道場にて待つ。』

…とんだ因縁をつけられたものじゃの。」

それを聞いた一貴は舌打ちをし、ぼそぼそと何かを言い出した。

「あの糞アマあ…俺は別に護衛なんざやりたくないわ！」

「ほっ！？なんか言ったかの？」

「い、いえ。別に…」

ニタニタと笑いながら一貴を見る重三郎も内心喜んでいた。

彼の現状を知っていたし、何よりも心配だった。

普段自分の感情を押し殺して過ごしていた一貴は誰に対しても敬語だった。

それが崩れた喋り方をしている。

本当に嬉しかった。

「お主はどうするつもりかの？」

お主の実力ならば簡単に勝てるじゃろ？」

「まあ、でも…」

そうこうしている内に家に着く。

一貴はぶつぶつと言いながら家に入って行く。

重三郎はそのまま紅蓮 醍三郎のもとへ車を走らせた。

紅蓮 醍三郎。

無現鬼道流の師範代で帝国斯衛軍中將の階級を司る者である。次期斯衛軍大將とも言われており優秀な人間である。

武術においても人並み外れた能力を持ち合わせた人物だ。

しかし、武術の点で言えば重三郎に勝った事はない。

樹雷式武術。

天木家のみで伝わる武術であり、この世で扱えるのは重三郎と一貴、二人しかいない。

一貴と紅蓮は三度手合わせをしているが、その内二戦は引き分け、一戦は一貴の負けという結果である。

年齢を鑑みるにそれだけでも一貴の異常さが理解できるだろう。

ちなみに、紅蓮は重三郎以外には負けたことがない。

紅蓮宅に車が着くと軍服姿の醍三郎が出迎えた。

「お久しぶりです、重三郎様」

「うむ、久しいの、息災か？」

「御陰様でございます。そちらもお元気そうで何よりです。

「ここではあれなので、どうぞ中へ」

門を通され客間へと移る。

「して、今日はどういったご用件で。」

そう、急な来訪で紅蓮も驚いていた。

普段の重二郎なら3日前には連絡が来る。

それが今回は険しい声色で電話がかかってきた。
当の本人は気が気ではない。

「うむ…その事なんだが…」

ゴクリ…紅蓮は汗を垂らしながら言葉を待つ。

「家の一貴に…果たし状が届いてしまったのじゃ…！」

儂はもう、心配で心配で。

もし怪我をしてしまったらどうしようとか、相手を殺してしまっ
たらどう処理しようか…

もう！どうすればいいのか解らん…！」

紅蓮は後ろにひっくり返っていた。

「ほっ！…どうしたのじゃ？」

「あ、いえ…」

心配して損した、という顔をしつつ話を続ける。

「誰からの果たし状なのですか？」

「それが、月詠の娘子のようなんじゃない。」

「は？…どうしてまた？」

「ほお、知らんと申すか。」

目を細くし、ドスのきいた声で紅蓮を睨む。

紅蓮は冷や汗をかき、しかし、冷静に考える。

だが思い当たる節がない。

紅蓮は首を横に振って答える。

「そうか。」

主は儂の息子を次期煌武院家当主の護衛に推薦していると聞いたが？

「それは…現当主との酒の席の話で良い男がいる、という話をした
までです。」

と、否定的な立場を示した。

どうやら食い違いがあったらしい。

すると紅蓮はハツつとした顔となり恐る恐る問うてみた。

「まさか、月詠はそれで…」

「そのようじゃの。」

「も、申し訳ありません!!」

真つ青な顔になった紅蓮は土下座を決め込んだ。

勘違いをした張本人ではないものの、この事態を招いた事の一因は
自分にあつたと思つたらしい。

だが哀れな紅蓮、重三郎の思惑通りとなつてしまった。
目が光っている。

「うん。まあ許さんでもない。
ただ、とある約束をして貰いたい。」

土下座をしている紅蓮からは彼の顔は見えない。

「して、約束とは？」

「うむ。」

一貴はとても大事な子じゃ。

それは儂にとっても、五撰家にとっても、日本にとっても、
だからの、紅蓮。

息子が、本当の息子になった時、支えてやってくれんかの。

あの子には敵が多すぎる。

すまん。このとおりじゃ。」

重三郎も土下座をした。

紅蓮は何も知らない。彼の素性、経歴を。

彼の言っている意味はわからない。

だが、その雰囲気は有無を言わせない迫力に満ちていた。

「重三郎様！おやめください！」

当然慌てふためく。

「いや、受諾して貰うまでは上げられん。」

「お受けしますのでどうかお上げください！」

その言葉を聞いた重三郎は安心した面持ちで顔を上げた。

「よろしく頼むぞ。紅蓮。」

「はっ、御意に。」

「よしっ！」

今日は儂が酒をおごろう！

行くぞ紅蓮！」

先ほどの雰囲気とは打って変わって朗らかな調子で紅蓮を誘う。

「まだ5時ですよ!？」

それに決闘はどうするのですか?」

「いいんじゃない!その件は一貴がどうにかするでの!行くぞ!!!」

と無理矢理彼を引っ張っていく。

紅蓮はまだ知らない。

これが紅蓮と重三郎の最後の会話となることを…

第4話：養父の気持ち（後書き）

じじい＝クソババアです。

瀬戸の再来のつもりで書いているのですが味が出ませんね…

樹雷式武術、なんでマブラヴの世界に！？

強いです、めっちゃ強いです。

だって宇宙一ですから。

下手したらBETA切れます。

マジで。

それでは。

第5話・修羅の道（前書き）

マヤとマナのキャラが難しいですね…

第5話：修羅の道

放課後の道場。

そこには腕組みをし、人差し指をイライラしながら動かしているマナと、ジッと時計を見つめているマヤがいた。

彼女らがここに着き30分が経過したところでマナはキレた。

「遅い！！」

あのオカマ野郎、逃げ出したんじゃないやねえだろうな！！」

比較的冷静なマヤは震える声で諭す。

「そんな事はないだろう…まさか、な…」

オカマ野郎…これは彼に嫉妬した人間がよく使う言葉である。

一貴の顔や肌は非常に美しい。

見るものを魅了し酔わせる不思議な力がある。

しかも、それを感じるのに男女の関係は無い。

普段、彼は眼鏡を掛けておりその素顔を確認した者は誰もいない。

もし仮に、眼鏡を取ったら”とんでもない事”になるといのが定説だ。

当の本人はその事を理解していない。

いや、理解をしているが彼らの定説とは違う意味で、だ。

故に彼の周りにいる”女性”は基本的に不戦の条約を結び、彼が話しかけてこない限り限り接触を持たない。

そうゆう事情もあり男性陣には、とことん嫌われている。

そんな好き勝手な妄想をされている本人は、道場の外で様子をうかがっていた。

「はあ…、覚悟を決めようか。」

そう呟いて戸を開く。

それに気づいたマヤは目をこれでもかかと開き睨みつけた。

「貴様！！何時だと思っっている！」

一貴はため息をするのを堪えて社交スマイルをした。

「月詠マナ、マヤさんお久しぶりです。

いや、少しばかり用があったもので…」

「御託を並べんでも良い…始めるぞ。」

マヤは懐から真剣を取り出す。

しかし、一貴は表情を変えずニコニコとしている。

「これはこれは、恐ろしい。

いえね、刀を交えずともお話をしようと思ひましてね。」

「その必要は…ないっ！！」

2人は短刀を逆さに持ち、つま先に力を入れ同時に斬りかかる。

その太刀筋、流石は月詠家、見事なものだった。

時間差で一貴の急所を突いて来る。

目。

首。

手首。

心臓。

腹。

金的。

ありとあらゆる場所を的確に、しかし、高速に。常人であれば確実に100回死んでいる。

だが、彼は樹雷式武術を極めし者。

”そんな”攻撃は見切られ、紙一重の所で全て躲していく。

月詠達の息が上がり始めたところで後ろへ跳躍する。

そして、未だ笑顔を絶やさず言葉を繋げる。

「名乗りも上げず斬りかかるとは、穏やかではありませんね。

ここは穏便にお話を…」

「ば、か、なっ…」

ハアハア、何故だっ…」

何故息も上がらず汗もかいていない？

そう聞きたいようだが、正直彼女らは酸欠でホワイトアウトしかかっている。

「あのですね…」

一貴は少し困ったような顔で、人差し指で頭をかく。

「私はその件については何も知らないですし、そもそも護衛なんて

興味がないのですよ。

ですから、その件は私の方から正式に辞退させて貰うつもりなのですが。」

そう、彼には関係がない。

彼は、今は天木の姓を名乗っているが元は五撰家の一角、崇宰の出身だ。

彼にとってはどうでも良い話で、本来は守られる側なのである。しかし、その言葉が不味かった。

「っ！貴様あ！

赤を司る斯衛が護衛をどうでも良いだと!?

斯衛の誉れを何だと心得るか！

まさかとは思ったが、貴様、外人か!?

ならばここで、死にさらせっ!！」

先の発言にはマナもキレさせた。

彼女たちにとっては斯衛の任務こそが生き甲斐であり名誉である。それを蔑ろにさせることはこの世で一番許し難いことだ。

息が切れているのにも係わらず2人とも突きを入れてくる。

だが、「一貴にとっても”外人”という言葉は唯一のコンプレックスであり逆鱗である。」

2人の突きを交互に脇で挟み一時的に拘束する。

「ほお、外人ですか」

「はははは…私は真正正銘日本人ですが何か？」

そう言うと彼の額には青筋が立ち、ドスのきいた声を出す。

「クククッ…」

そう、そもそも、お前らが喧嘩を売ってきたんだよな？

ああ、そうだった。なら遠慮なんていらねえよなあ？

なあマヤ、マナ？」

彼の顔は既に穏やかなものではなく、鷹のような目つきに変わり、口元は張り裂けそうな程に上がり、鋭利な犬歯が強力に自己主張し、おぞましい笑みを浮かべている。

黒く澱んだ空気が周囲を包んでいく。

そして、彼女達の手首をつかみ上げ一気に力を込める。

うめき声を上げるマヤ、マナ。

一貫の放つ鬨気に当てられ脚や歯、腕は小刻みに震えている。

彼女らの気力は完全に削がれ、持っていた懐刀は手から滑り落ち畳に突き刺った。

「そのような力量で私に勝負を挑もうとは、片腹痛いわ。」

そのまま彼女達を壁へと叩きつけた。

間一髪で受け身をとって辛うじて意識は保っている。

「くっ…」

どうしようもない者を相手にしている。

それを理解したが、時は既に遅し。

勝負を持ちかけたのはこちら側なのだ。

彼女らは、最後の力を振り絞って殴りかかったが、勝負はもう既に
ついている。

易々と避けられ、逆に腹部を強打される。

「ふん、狗め。」

所詮、狗では私を倒せない。

だがその根性だけは認め、生かしてやろう。

さらばだ、月詠マナ、マヤ。」

その言葉を聞いて彼女達の意識は途絶えた。

「ふう……」

ため息をついて我に返る。

一貫は、これだけの事をすればもう立ち向かってくることは無いだろう、と内心想いつつ気絶している彼女達を見る。

目立った外傷は無い。

美しい女性なのだから傷でもついたら不味いという彼なりの最大限の配慮だった。

「20分もすれば目も覚めるだろうか？」

独り言を言いつつ自分の上着を脱ぎ彼女達にそっとかけ、道場を出た。

すると、やはりというか、何というか重三郎が佇んでいた。

「済んだかの？」

優しく語りかける。

「どうせ、最初から見ていたのでしょっ？」

その顔はあきれた表情、悲しみの表情、様々な感情がいられたものだった。

今回の件でまたつまらない日常へと戻っていく。

決闘を受ける前から覚悟していたことではあるが、やはり悲しい。

そして、その表情を読み取られないように、迎えの車を待たしている方へ歩く。

その気持ちを重三郎は知りつつも彼を呼び止める。

「次期煌武院家当主の護衛は受けるのかの？」

歩みを止め、少しばかり考えるそぶりをした後答えた。

「私は赤を司る斯衛ですから。」

「そうか…。その旨、煌武院家に伝えておく。」

「他の五撰家は黙っていないと思いますか？」

「ほっほっほ、大丈夫じゃ。」

お主の修羅道は、まだまだ始まったばかりじゃ。

ここで歩みを止める訳では無かるうに。」

それもそうですね…と小さく呟いてその場を後にした。

第5話：修羅の道（後書き）

フルボッコ…かな？

一貴はひとりぼっちのままです。

でも多くの大人達が彼を見守ってくれています。

そうゆう事に気づくのは何時だって遅いものですよね。

ここで、一貴の設定を少々いじります。

眼鏡を掛けているとき、黒目に見えるというのはそのままです。

ですが、眼鏡着用時はウォルター少年、青年。

眼鏡を外したときはアーカードと言った具合に変更します。

凶悪さの演出です。

それでは

第6話：表面化する陰謀（前書き）

筆者は陰謀論者ではありません。
残酷描写が入ります。

第6話：表面化する陰謀

駐日米大使館に一通の封書が届く。宛名もなく、切手も貼られていない、端から見ると危険な郵便物である。

しかし、駐在武官はそれを見るなり箝口令をひき、大使館の内部で一番秘匿性の高い部屋へ移動した。扉を開けるとそこには、初老の男性がパイプをふかしながら、目をつむり座っていた。

武官は敬礼をした後、その怪しげな茶封筒を開封し内容を確認する。全文を読み終えると火をつけ、近くの灰皿に投げ捨てた。

「どうやら暗殺に失敗したようです。」

「そうか…。本国へは私から連絡しておく。」

駐日米大使マイケル・マンズフィールドは渋い顔をしつつ答える。武官は、今日は何も見えていません、と述べた後退室する。

その姿を見届け、マンズフィールドは通称”Supermantube”と呼ばれる公衆電話ボックスのような極秘通信用の個室へ行き、ホワイトハウスへ報告を上げた。

報告だけのつもりだったのだが、そのまま大統領へと通信が回される。

「どうやら直接聞きたいようだった。」

「暗殺は失敗したかね？」

「!？」

大統領それはどういふ事ですか？

暗殺をご命令なさったのは大統領ご自身ではありませんか！

Amaki Familyは日本にとっても世界にとっても重要な人物だったのですよ！

その暗殺指令をまるで望んで無かったかのような…」

マンスフィールドは戸惑い、つつい声を荒げて問い詰める。

しかし大統領は失態を気にせず、彼の言葉を妨げ再度質問した。

「それでどうだったのかね？」

「失敗しました…」

受話器からは、ため息と共に椅子に座る音が聞こえてきた。

「この通信はチューブからだったな。」

「はい、その通りです。」

「私はあの時、君に日本との架け橋を、そして平和を頼んだ。

日本という国と共に歩み、極東のBETA侵攻食い止める為に。

今回の件、Amaki Kazuki暗殺命令はそれに矛盾している事だ。

本当に済まないと思っている。

だが、あの命令は私が出したものではない。

その偽の命令書を知った私はAmaki Zyuzaburoに連絡したのだ。

息子が狙われている、と。」

「そんなことが!？」

いえ、私も貴方がそのような命令を出すわけが無いと思っ

したが：

まさか、そんな…

では、ホワイトハウスに裏切り者がいるということですか？」

「…ホワイトハウスだけではない。

アメリカ、そして日本にも”彼ら”のシンパがいる。」

「”彼ら”？彼らとは何者なのですか？」

そこでまた大統領はため息をつく。

「それがよくわからんのだ。

Z y u u z a b u r o u から聞いた話では、A m a k i K a z u k i 暗殺に関して赤の斯衛が絡んでいたそうだな。」

「ええ、その通りです。

T u k u y o m i：なんとらを差し向け殺す予定だったそうので、日本の文化にはH a t a s h i z y o？なる決闘で公然と殺すとの話でした。

子供同士で斬り合いとは非常にカルチャーショックではありませんが。」

「それだけか？それしか聞いていないのか？」

「CIAからはそう聞きましたが？」

「…そんな内容でK a z u k i を暗殺出来るはずがなかつた。実は、今朝ホワイトハウスの前にスニーカーが4つ置かれていた。」

当然報道されていない。この意味がわかるかね？」

「いえ…わかりません。」

「4つとも屈強な男性の死体が入っていた。米軍が支給している迷彩服と銃込みでな。体は鋭利な刃物で”さばかれていた”。

そして丁寧に首が切られスーツケースの上に並べられていたよ。また、同様の死体が日本でも発見された。そっちは日本人だったようだが、こっちは米国人だった。しかも、”すでに死んでいるはずの”。」

「CIAが私に嘘の報告を？既に死んであるはず？わ、訳がわかりません…
どういう事ですか！大統領！！」

「そう、焦るな。」

その後、Zyuzaburouから連絡が来たよ。決闘の邪魔者がいたと。

まあ、こんなダイレクトには言わなかったがね。

そして、4つの死体を調べたところいずれも元合衆国陸軍特殊部隊所属隊員だった。

私も知らない部隊があるのだろう、この国には。

ここからが大事なのだが…
彼に言わせると”キリスト教恭順主義派”が絡んでいるというのだ。

だがそのような組織名はいくら調べても出てこない。」

「私も聞いたことがありません…。」

「そこなのだよ…。」

なぜ彼を敵視しているのかわからん。

我々はBETAの他にも敵にまわしているようなのだ。

我々米国にとって彼の死はBETAとの戦いにおいて札を一つ失うのと同じだ。

君にも協力して欲しい。」

「わかりました大統領。

極東の平和のためにも必ずや。」

「頼んだぞ。マイケル。」

「はい、レーガン大統領閣下。我が合衆国に平和と栄光を。」

そのまま受話器を切る。

自分の直ぐそばにも敵がいるとマンスフィールドは実感した。

彼は大統領の為にその足を動かし始めるのであった。

第6話：表面化する陰謀（後書き）

瀬戸様のような女性はいいと思います。
最高です。

なので重二郎を鼻肩します。
暗躍します。

キリスト教恭順主義派の情報は当然のごとく、ナチからもたらされました。

それでは

第7話：友愛＋（前書き）

10/18

月詠マナ主観です。

若干の描写変更という形をとりました。

第7話：友愛＋

「本日、日本時間10時30分頃、米合衆国レーガン大統領は銃撃による大量失血により、大学病院で死亡が確認されました。これを受け副大統領である…」

「暗殺を企てたと思われる人物は当局によって現行犯逮捕されたものの、警察署へ送致中に射殺され…」

「大統領の死亡を受け、帰国中だった駐日米大使マンズフィールド氏を乗せた飛行機は、依然、北太平洋で通信が途絶しており…」

テレビのチャンネルをいくら変えても同じ事ばかりだ。
米国の大統領がどうこうなっても日本には関係ないではないか。

「ふう…ッ！」

痛い。

肋骨が折れているのだ。

マヤ、私の姉は軽傷で直ぐに学校へ行ったが、私は全治5週間の重傷と医師に診断されてしまった。

故に入院中だ。

そもそも、その原因は私達にある。

天木一貴に決闘を挑んだ…そして負けて…

…先日、紅蓮中将がお見舞いに来てくださった。

「月詠よ…決闘に負けたそうだな。」

「これは紅蓮中将閣下お恥ずかしいところを。」

ベッドから起き上がるうとするマナ。

「いや、けが人は寝ておれ。」

紅蓮の大きな手でその動きを制す。

「お心遣い感謝いたします。」

大きなメロンと花を持って来た紅蓮は、そのままメロンを切り始める。

部屋にいた侍従は花を飾り終わると部屋を出て行く。

「なあ月詠よ、何故天木一貴に手を出した？」

マナの目を見ずに軽い口調で問うた。

「それは…、紅蓮中将こそ良いのですか!？」

あのような怪しげなる奴が煌武院家の守護をしてっ!」

そこまで言っつてうずくまる。

腹に痛みが響くのだ。

切り終えたメロンを皿に移しつつ紅蓮はため息をつく。

「はあ…、天木殿の何処が怪しいというのだ。
それに煌武院家の護衛などという話は上がっていないぞ？」

「は？紅蓮殿はご存じないのですか？

ある権力者が煌武院家の護衛に、彼奴を推薦したのですよ。

あんな怪しい天木家を押すなどとは笑止千万。

明らかに没落の一途を辿る天木家を生きながらえさせようとする
商人の考えに決まっています。

聞くに、あの天木家はアメリカに兵器を売り莫大な利益を得てい
るそうでは無いですか！

これはもうアメリカの命令に違いありません！

あの汚い商人どもがアメリカに媚びを売って儲けをさらに出そう
としているのです。

煌武院家の護衛をし、発言力をつけようとする魂胆が丸見えです
！」

紅蓮は話を囁むように聞きメロンを月詠に差し出す。
それに礼を言ってマナは食べ始める。

「そのような世迷い言…一体誰が…」

独り言のように紅蓮は呟く。

だがマナはその言葉を聞き逃さない。

「世迷い言とは紅蓮閣下！

私達はあの有名な児玉誉士夫様から直に聞いたのですよ！」

ハツとした顔をした月詠。

実は無理を言っただけで聞かせていただき、秘密に、と言われていたのだ。

「…月詠。それは真か？」

マヤはそのまま俯き、小さくうなずいた。

「はっはっはっ！」

月詠、兎玉様に一本とられたなあ！」

励ますように月詠の肩を叩く紅蓮。

「えっ。」

「兎玉様はからかわれたのだよ。」

その様子だと、しつこくお尋ねしたのでろう？

ある権力者とは私のことだ。まあ、推薦はしておらんがな。

誤解がないように言っておくが、彼が武術に長けているという話を煌武院様にお話したただけだ。」

「し、しかし、確かに護衛に推薦されたと…」

「何かの聞き間違いではないか？」

煌武院様がとても関心を持っている…という言われ方をしたのでは？」

「言われてみればそんな気も…」

「はっはっはっ。そういう事だ。」

「貴殿には謝っておくのだぞ。」

「で、ですが…」

いまさらなんと言えはいいのか分からなかった。

「大丈夫だ。彼は優しい子だよ。

現に君たちは”生きて”いる。

肋骨が折れた程度で良かったではないか。

彼に言わせれば、を殴るのは心苦しかったようだぞ。

実際顔を殴っていないしな。」

「それは一体…？」

「分からののか？罪だなそれは。

可愛らしい顔を傷つけたく無かったのだよ、彼は。」

そこで月詠はキョトンとした。

確かに顔を狙ってこなかったし、体を見渡す限り目立った外傷は無い。

手加減をしてくれていたのか…。

それに…今までにそんなことは言われたことがなかった。

とたんに顔は赤く染まり、心なしか頭から湯気が出ている気がする。

「か、かわいいとは、破廉恥な！」

そう考えると急に彼の顔が浮かぶ。

今までは考えてこなかったが、顔は美形だし、強いし、名声も…

そこまで考えて頭を強く振る。

「ぐ、紅蓮閣下の御前で恥をかかせおって！」

次あつたら叩き切つてやる!!」

「ははははっ!そんなことを言うな。

彼にきちんと礼と詫びを入れておけよ。」

そう言つて紅蓮中将は行つてしまわれた。

今回の件、決闘は私達の早とちりに過ぎなかつた事を教えられてしまった。

早く一貴殿に合つて謝らなければ…

物思いに耽つているとドアをノックする音が聞こえた。

侍従がドアを開けに行く。

私はテレビのスイッチを切つた。

なにやら騒がしい。もめているようだ。

「どうしたのだ?客か?」

「は、はい…ですが…」

困惑しているようだ。客は客だ。

「構わん、通せ。」

「はい…私は外で待たせていただきます…」

「ん…」

するとカーテンレールが開けられる。
そこには一貴殿がいた。

「き、貴様は！」

ついつい指を指してしまった。

右手には籠に入った林檎、バナナ、左手にはゆずレモン茶と書かれた瓶を持っていた。

「貴様は無いだらう、貴様は。」

「ふん！貴様など貴様で十分だ！」

胡座をかいてそっぽを向いてしまった。
冷静に考えればかなりの非礼な態度だ。
紅蓮閣下の仰った謝罪が出来ないではないか！

「まあ……いい。見舞い品だ。受け取っておけ。」

備え付けの机の上に見舞い品が置かれる。
そして椅子を引きずり出し一貴殿は座る。

水をうつたような静けさが空気を支配する。

私はただ一貴殿に謝りたいだけなのだ。
だがしかし、当の本人を目の前にしてしまうとそれが出来ない。
そもそも彼は何しに来たのだろうか？

一人で勝手に現状理解に努めていると、突然相手が頭を下げてきた。

「月詠…

すまなかつた!!」

「お、おい！何で貴様が謝る！

元はと言えば私達が仕掛けたことなのだぞ！」

そう、私達の勘違い。

私達が謝るべき所。

「いや、女の子に手を上げてしまった事実だ。

それに怪我までさせてしまった。

すまない。本当にすまない。」

それを自分の責任として受け止めようとしてくれている。

私が”女の子”だから…。

男だったらこうはならないのだろうか？

いつもだったら、男、女と差別するな！、と言っている。

だが、今回は不思議と”女”として認識されている事に喜びさえ感じている。

「いや…いいんだ。

頭を上げてくれないか。」

頭を上げて欲しい。

頭を下げさせている私が悔しい。

「良いのか…？」

私達は腹を切って詫びなければならぬほどの事をしでかしている

筈だ。

それを流そうとしている。

この”男”は…

「いい…」

そうして彼は顔を上げる。

不覚にも目が合ってしまった、私の胸は高鳴ってしまった。

「くっ！き、貴様は手加減をしたようだな！

いつか貴様を追い越してやるからな！覚悟しておけよ！！馬鹿！」

馬鹿なのは私だ！！

なんでこんな事を言ってしまうのだろうか。

まともに話が出来ない。

「ば、馬鹿って…」

彼は苦笑いをして頭を掻く。

若干俯き加減になって一貴殿は考え込む。

馬鹿、馬鹿と罵倒ばかりしていれば嫌になるだろう…。
嫌われてしまったらどうか？

そして私は少しのぞき込むようにして彼を見る。

すると急に顔を上げ、にこやかな顔でこっちを見る。

「いや、分かった。いつでも勝負を受けてやる。

だが、今度は決闘（死合い）はよしてくれよ。

手合わせで頼む。」

突然の笑顔に動揺してしまい変な事を口走ってしまふ。

「て、手を合わるだど!!」

何を破廉恥なことを言っている!

早く帰れ!」

自分の言っている事が恥ずかしくなってしまう、机に置かれたせっかくの見舞い品を掴んで彼に投げてしまふ。

「おいおい!!よしてくれよ月詠。

わかった。帰るから。」

と、いそいそと出て行ってしまふ。

何でも簡単に引っ込んでしまふんだ。

私が馬鹿みたいじゃないか。

「待て、天木!」

つい、止めたくなってしまった。

「どうした?」

彼は振り返る。

だが私は窓の方に顔を向けてしまふ。

「その…だな。

わざと顔を殴らなかつたそうだな。

何でだ?」

聞く必要の無い事をつい聞いてしまった。

「そ、それは…」

急に一貴はどもって頭を掻いている。

「か、かわいい女の子の顔を傷つけるのはどうかなって…」

く、くそっ！

なんて卑怯な奴だ！

「フンツ！破廉恥なお前らしい理由だな！」

そもそも何が卑怯なのだろうか？

「す、すまん、月詠。」

そこでまた外に出ようとする。

「ま、待て。話は終わってない。」

呼び止めておきたい。

もっと話を聞いて欲しい、もっと見ていて欲しい。

そんな気持ち芽生え始めてしまった。

「私のことは、そ、その…、マ、マナと呼んでいいぞ！

いや！決して許した訳じゃないからな！

宿敵として認めてやったただけだ！」

許してもらおうのはこちらの善なのに…。

「そうか…じゃあ俺のことも名前で良いよ。」

それなのにその事は咎めない。
もう、どうすればいいのだ！

「うるさい！！早く帰れ！馬鹿！」

また、馬鹿と言ってしまった。

彼はそのまま帰ってしまふ。

うう…、そうになると心苦しい。

自分が恨めしい。

そんな事を考えてると彼のあの笑顔が浮かんでくる。

「一貴か…」

何故か彼の名前を呟いてしまって、急に恥ずかしくなりベッドに籠もってしまった。

第7話：友愛+（後書き）

紅蓮「アタックチャ〜ンス。」

すいませんでした。反省しています。

児玉 清さんが亡くなった時は非常にショックでした。

さてさて、ついにマナさん…きましたね…。

彼らはまだ7歳ですからね。

青春ですな〜。

ちなみに誉士夫さんは、この後友愛され…

おや、誰か来たようだ。

10/18

いかがでしょうか？

好きな子をいじめてしまう…そんな心理を描写してみました。

そして、男と女を意識する年頃？

あれ？普通中学生くらいですよね？

…この世界の人々は精神年齢が高いのでしょうか！

照れ要素は難しいです…。

それでは。

第8話：Kyrie eleison（前書き）

陰謀論の極みです。

第8話：Kyrie eleison

メキシコにある、とある教会に電報が届く。それを十字架を首にかけた一人の青年が受け取った。彼の表情は明るく、非常に晴れやかだった。

「助祭様、良いことがあったので？」

郵便局員は十字を切った後聞く。

「ええ、それはもう。」

これは Good news（福音）ですよ。

こんな日に来る電報はさぞ、幸福な内容でしょうね。

貴方にも神のご加護を。」

そう言つて礼拝堂の扉を閉じる。

そこには修道着を着た一人の女性が居た。

彼女を確認すると、歩きながら電報を開く。

「ああ、神よ、何故我を見捨てたもう……」

先程までの嬉々とした表情とは打って変わって、悲壮めいた顔になり、倒れ込むように膝をついた。それに驚いた女性は駆け込んでくる。

「どうしたの!?!」

泣いている、彼は、泣いている。
父が死んだ時は泣かなかったのに。

「友が…我らの友が…亡くなりました…。」

「どうゆうことよ…」

答えなさい!! トリファ!

泣き崩れてまともに話が出来ないこの男、ヴァレリア・トリファの胸ぐらを掴み揺する。

「私は何も聞いていないのよ!

貴方から”あれの” 解読が出来たからって来てみれば、何よ! この様は!

我々は何千年もこの時を待っていたのよ!!」

それでも反応しない。

目からは滝のように流れる涙。

しかたない、と呟き彼を担いで個室へ移動する。

身長190cmもある巨体を担ぐこの女性の名は、リザ・ブレンナ
I。

身長174cm、B:93 W:60 H:91という、シスター

ならざるグラマラスなボディを持っている。

ちなみにFカップだ。

彼女の存在が人類にとって福音と言っても過言ではない。

が、今回の問題はそこではないだ。

個室に着きトリファを椅子に座らせ、水を差し出す。未だ虚ろ目だったが、頷いてそれを受け取る。飲み終えた彼は一息つくと、話し始めた。

「確かに解読できました…しかし…」

「はあ…解読できたのは分かっているのよ。」

それでそれと今回の電文はどう関係あるのよ？」

真つ赤に腫れた目をハンカチで拭きながらトリファは答える。

「我らの教義、”汝ら耐えよ”は覚えてますね？」

「それはそうよ。」

それが我々の行動理念であり、根本理念だもの。

『聞こえし者伝えよ。』

汝ら迷える子羊達、新たなる扉開く時、悪魔に合いにけり。

されど、それ悪魔にあらず。神の子なり。

汝ら耐えよ。審判の日は近い。』でしよ？

そして”赤、白、黒”。

これがあの”失われたモーセの言葉”。

つまりは”カバラ”を用いた我々の世界解釈の仕方。

または”世界樹”の活用、って言っても良いわね。

まあ、そのまま理解してしまった、残念なキリスト教徒がいるわけだけだ。」

そんなこと常識でしょ？、と、蔑んだかのような目つきで机にもたれかかりながら答える。

解釈の仕方は様々である。

失われたモーセの言葉はルーン文字で書かれており、それ故に伍長は、ゲルマン人こそが優越民族だと叫び始めた。

そこまで聞き少しうなるような声を出しながら彼は話を続ける。

「そう…。先代の方々は新たな扉を無理に開こうとし、ナチス・ドイツに手を貸した。

そして、あのカルトマニアは我々の意見を無視し、暴走し始めた。故に我々がアメリカを使って止めたわけですが…」

彼らはナチス・ドイツを利用し新たな扉を開こうとした。

そして”ウイスパード”（聞こえし者）は、ナチスの資金を用いて、聞こえてくる声を頼りに様々な兵器を作り出した。

ヘーネル StG 44

ジェット戦闘機「Me 262」

V1飛行爆弾

V2ロケット

ヴァツサーファル

ステルス技術等々…

挙げればきりが無い。

そしてそれこそが、現代兵器の源となっている。

だが、余りにも力を付けてしまったナチスは1000年帝国なる世界創造をしようと夢想し始める。

これは彼らが望む世界ではなかった。
世界全てが平等に力をつけてもらわなければ、審判の日は耐えられない、と言うのが彼らの考えだった。
ナチスの1000年帝国は力による征服、若しくは屈服…。
これでは世界がまとまる筈がない。
ローマを繰り返す事となる。

よって、自由の国であるアメリカ合衆国に彼らは目をつけ、新技術の提供をし始める。

それが原子爆弾であり、ロケット技術だ。

この技術を用いてアメリカは第二次世界大戦に勝ち、世界に”影響力”のある国となる。

そして、冷戦。

地球上に扉がないことは国際連合を通して分かった。
ならば宇宙にあるはず。

そういう考えがあり、米ソは宇宙開発に力を注ぐ。

結果、火星に”扉”が発見された。

それと同時に”神の子”（BETA）を発見し今に至る。

BETAの認識は彼らの組織内で大きく分かれた。

BETAは神の子であり、神は我々人類を試しておられる、ここまでは共通認識、この後が3つに分けられる。

- 1、それによって人類が減ぶとしても、それは神の意志であり、無為に逆らう事は教えに反する。（キリスト教恭順主義派）
- 2、それに抗う事こそが、神の意志であり、戦い続け約束の地を得

ることこそが真理である。(シオニズム)
3、それに抗い、我らのメシアが到来するまで耐え続け、最後まで抵抗する。(メシア主義)

もとはと言えば、3つめの主張が源流だったが、今やそれを信仰する者はあまり多いとは言えない。

そしてその信仰の大本が彼ら”聖槍十三騎士団(L D O)”である。

「まあ、結果として”扉”の位置はわかった訳だし、よかったんじゃない？」

我々”ウイスパード”の役割は果たされたのだから。」

ブレナーの言葉を聞いた瞬間、トリファはハンカチを床に叩きつけて叫んだ。

「違うのですよ!!!」

我々の役目は終わっていないかった!!!」

彼の眼光は異常に鋭くなり彼女を睨みつける。

「あれには続きがあった!!!」

それこそが今回の解読の結果!!!」

『彼の者を待ちたまえ、聞こえし者よ。』

彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。

その者、樹に愛されし者なり。

愚かなる者、神の御技使いし時、彼の者目覚める。
然れども、未だ彼の者迷える子羊なり。
されど、彼の者に従え、聞こえし者よ。
彼の者救われし時、大いなる力放たれなん。
新たなる扉開きし時、汝ら皆繋がりて世を超越す。
聞こえし者よ、彼の者愛せよ。
彼の者友なり。」

我らは…我らの唯一の友を…今日失ってしまった…。
解読するのが遅すぎた…。もう、終わりです…。」

そこまで言うと、床に崩れ落ちるトリファ。

開いた口がふさがらないブレンナーは、え、え？と何度も繰り返している。

「ま、まさか、その友って…。」

「重三郎様です…。」

最後の手がかりが今日亡くなってしまった…。」

「う、そ、でしょ…。」

「いえ…本当です。」

ブレンナーは放心状態。

対して、トリファは平穩を取り戻しつつあった。

彼女の肩に手をやさしく乗せる。

「リザ…シヨックなのは分かります。」

しかし、聞こえし者よ、彼の者愛せよ。彼の者友なり。

この教えに沿って重三郎様にお別れを言いに行かなければ…。

これも、神のお導きかも知れません。

終わりだと分かっている、抗い続け、耐えるのが我々だったはず。

さあ、行きましょう、リザ。」

ブレンナーは泣き崩れてしまった。

それを彼は胸を貸す事で癒す事にした。

第8話：Kyrie eleison（後書き）

父ヴァレリアン・トリファは亡くなり、跡継ぎはヴァレリア・トリファとなりました。
ンが有るか無いかの違いです。

Dies iraeのキャラは一部しか出ません。
聖槍十三騎士団の欠番も有ります。

テンブル騎士団の旗は赤、白、黒。
ナチス・ドイツの旗も赤、白、黒。
聖槍十三騎士団の旗も赤、白、黒。
類似性が有ったのでつけ込ませて頂きました。

駒が揃いつつあります。

暴れられるのもう少し先…。

第9話：邂逅の時（前書き）

10/18に 第7話：友愛 を更新しました。

今回は長めになってしまいました…

第9話：邂逅の時

「祇園精舎の鐘の声、か…」

葬儀中誰かがポツリと呟いた。

それは一貴に対して言った言葉なのか、それとも自分自身に言った言葉なのか…。

榊は彼を思っつてか、無言で刀を抜こうとし、一貴はそれを手で制す。

「おじさん、ありがとう。」

父はそんな事を望んで無いと思う。」

それを見ていた内海も懐から手を引いた。

榊は何か言おうとしていたが、先に一貴が話し始める。

「このご時世、ああゆう事を言うのはもつともだと思えます。」

あのかつての強国、ソ連がアラスカに逃げるほどの人類の敗走劇。それを目の当たりにして弱気にならない方が不思議です。」

1982年初頭、ソ連は米国に頭を下げてアラスカを租借させてもらい、移住が次々と進んでいるらしい。

ソ連と言えば米国と冷戦を繰り返した大国。

ニユースでそれを聞いたときは日本中が驚愕させられた。

あのソ連が撤退している、と。

そして、ヨーロッパもBETAにほぼ制圧されかかっている。

「50年という期限付きで租借していますが、果たして人類がそこまで…」

「坊主！その先は言っちゃいけねえ。」

このBETAとの戦い、既に詰みなのだ。皆それを知っている。

いくら、いくら戦ったところで押されていく。

戦争の基本は物量、人海戦術。

まあ、大量破壊兵器が有れば話は別だが、今は無い。

あつたところで意味は無い。

大量に打ち込んだところで光線級に落とされるだけであり、仮に当たってもほぼ無限にわいて出てくる。

そしてBETAの生態系も殆ど分かっていないのだ。

「そうですねよ、”会長”がそんなだと現場の我々が萎えてしまいますよ。」

内海はいつもの笑みを崩さず苦言する。

朝、目が覚めると一貴はいつものように服を着替え、顔を洗い、うがいをし、歯を磨く。

いつものように自室を出て、いつものようにテーブルにつき、いつものように食事を待つ。

ただ一つ、重三郎が席にいない事を除いて。

女中達はいつもならいる重三郎が居ない事に驚いていたものの、呼びに行つて良いものか考えあぐねていた。

「誰かおじさまを呼んできてください。」

畏まりました、と返事をし頭を下げて外に出る。
じじいがないだけでも、この大きなテーブルはもっと大きく感じるものだ。

数分後、扉が強く開けられる。

「何事か！」

上女中は声を上げる。

「重三郎様が！重三郎様が！」

異常に動揺して叫んでいた。
息を整えつつ、また叫ぶ。

「止まっています！心臓が止まっています！」

重三郎はベッドの上で静かに息を拭き取っていた。
医師の診断結果では老衰。

享年83歳。

遺言は簡潔に一言。

「全てを息子である一貴に。」

法的には全く意味の成さない書き方。

それでもその通りとなり、天木商会、天木重工業は重三郎の意志を尊重し、天木一貴を正式な跡取りとして認めた。

まだ8歳という若さで天木家当主となり、そして天木グループの牽引者となった訳だ。

この現状に人事は大きく動いた。

天木商会には内海を、天木重工業には榊を筆頭として動く事となった。

榊は帝国陸軍技術大佐、兼、技術廠・第壹開発局部長。

彼は82式（F-4改）撃震の名付け親であり、かつ、開発主任である。

その伝説的とも言える彼が、帝国陸軍を辞め天木重工業に戻ってきた。

内海は天木重工業、戦術機課課長。

新OS、つまりは「ASURA改」開発、そして「Zephyr Phantom System」の開発主任をしていた。

実は彼、天木グループに来る前はかなり非合法的な商売活動をしていたらしく、公安当局に逮捕される寸前に重三郎に助けられた過去がある。

曰く、アウトローな商売では世界一位だったそうだ。

しかし、重三郎の実力主義のお陰で会社では好き勝手な事が出来、それ以来そうゆう関係からは一切手を引いている。

実際、業績を上げ続けているのは彼の合理性が一端にあるのだ。

幸い、天木家は他の殆どの武家との縁を既に切っており、関わりがあるとすれば、煌武院家とその身边、そのくらいである。

故に今回の相続関係に一切口を挟んでこなかった。

突然、背後にいた黒崎が耳打ちをしてくる。

「会長、ドイツ系の方々がいらっしやるようです。」

ドイツ系…ああ、ナチの関係者ね、と脳内で納得しつつ、頷いて返事をする。

ぞろぞろと…。

ざっと100人、いや1000人!?

一人一人、一貴を見るたびに握手を求めたりハグをしてきた。

一言二言思い出話や、礼を言いながら皆涙を流し、感極まっているせいか皆ドイツ語だ。

そこで一貴は思い出す。

自分は今まで泣いていなかった事に。

その一団の最後に長身の男性と、美しい女性が喪服姿で現れ、一貴を見ると頭を下げた。

「初めまして、一貴さん。

この度は…心からお悔やみ申し上げます。」

流暢な日本語が出てきた事に少しばかり気をとられたが、一貴も頭を下げる。

「…お心遣いありがとうございます。」

顔を上げ長身の男性は話し始める。

「突然の重三郎様の死、私たちは非常に困惑いたしました。」

しかしながら、老衰という天寿を全うされた亡くなり方…。

我々も…。」

と、話している途中、隣の女性が彼を肘でつついた後、咳払いをした。

恐らく、名前を紹介していない事に対する一貴の心情を察してくれたのだろう。

彼は一貴の顔を見て、申し訳なさそうな顔をした。

「申し遅れました…。」

私、ヴァレリア・トリファと申します。

父のヴァレリアン・トリファがお世話になりました。

彼女はリザ・ブレンナー。

教会のシスターです。」

「貴方がヴァレリア・トリファさんですか！

お初にお目にかかる。」

私も貴方のお父上には大変お世話になりました。」

いえ…重三郎様がしてくださった事に比べれば…、と謙遜する。

「しかし、重三郎様の死は人類にとって大きな損失となりました。」

「…父は本当に偉大な方だったと私も思います。」

「なんと！！一貴様、今”父”と！？」

亡くなった時からだろうか、いつの間にか、じじいではなく”父”と呼んでいる一貴がいた。

今の今まで誰も気づいていなかった。
むろん本人もだ。

「おお…重三郎様もきつと喜んでらっしやる…」

「喜ぶ？なぜ？」

一貴は本当に分かっていない様子だった。
トリファは慈悲の眼差しで話し始める。

「重三郎様は一貴様の事を本当に大切に思われていた。
私の父に会うたび、こう漏らしておられた。

『いつも、一貴は父と呼んでくれないのじゃ。じじいじじいと呼ばれている。』

でも、一貴は私の息子。あの子は大切な子。
例えば血が繋がっていなくとも、私の息子なのじゃ。

今度は何が起ころうとも守り抜く、今まではそれが出来なんだ。
しかし、今回は、今回こそはそれを成し遂げる。

それが儂の最後の生き様よ。』
決意表明を私の父に毎回する…。素晴らしい”お父上”に巡り会
えましたね、一貴様。」

「そう、ですか…」

そんな事だったらもつと早くに呼ぶべきだった…。
私の恩人にして私の養父。

感謝しても感謝しきれない存在に今まで何が出来ただろうか。

心なしか一貴の目は潤んでいる。
涙を堪えているのだ。

「しかし、重三郎様は感謝を望んでいなかった。

『それが、親子というものよのう。』、と。」

まるで一貴の心情を読むかのような言葉。

ついに、彼の涙腺は決壊した。

ぽたりぽたりと、大粒の涙が流れ落ちていく。

「……」

誰も声をかけられなかった。
だが背をさする事だけは出来る。

「私は…父のしてくださった事に感謝しているっ…

でも、今となっては、その言葉は届かないっ…

なれば黄泉の国まで轟くような武勲を立て、その恩に私は報いる
！！」

眼鏡を外し涙を必死にぬぐいながら宣言する。

それはつまりBETAに勝つという事だ。

内海も榊もトリファそれに同意するように強く背中をさすり泣いた。

だが、ただ一人、リザ・ブレンナーは破顔していた。

日本人離れたその容貌には当初腰を抜かしそうになった。

黒い髪、白い肌、そして美しい顔。

これはさぞ女性にもてるだろうと思い、心の中でほくそ笑んでいた。

しかし眼鏡を取った彼の目はどうだろうか？

赤だ。

一瞬、身体がふらついた。

目を見た瞬間、脳裏に言葉が走る。

『彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。

その者、樹に愛されし者なり。』

樹に愛されし……つまりは生命の木に愛されている者。

”天”の”木”、そして”一”人の”貴”い人。

天木一貴。

「ああ…」

全身が震え出す。

このお方だ、このお方こそが我らの救世主。
彼の者友なり。

本当に友だ。我々唯一の友だ。最後の友だ。

「Ich erinnere euch, Bruder, an
das Evangelium, das ich euch
verkündigt habe. Ihr habt es an
genommen; es ist der Grund, au
f dem ihr steht.
Durch dieses Evangelium werde
t ihr gerettet…»

彼女はそのまま膝をつき祈りの姿勢をとり祈りを捧げ始める。

「第一コリント15章？」

トリファは突然の出来事に目を点にしている。
だが、彼も頭の切れる男、それに至った。

「!？」

まさか!」

一貴の顔を凝視する。

私は正常だ
「

心を見透かされたようで内海は一瞬たじろぐ。
その隙を突き、トリファはその巨体翻し榊の刀を蹴り飛ばし、ブレ
ンナーを抱きかかえた。

「Auf Wiedersehen .

我が主にして、我が首領閣下。

次回伺いする時は、正装にて参上させていただきます故に、今回
の無礼はお許してください。」

頭を垂れ、最後まで言葉を発すると、足下に手榴弾らしき物5、6
個を落とす。

「「危ない!!」」

榊と内海は一貴に覆い被さるよう押し倒す。

警備員は今更になって銃をトリファ達に向ける。

しかし、時は既に遅し。

爆音と閃光、ついでに煙幕をまき散らし、彼らはその場を去ってい
った。

第9話：邂逅の時（後書き）

聖槍十三騎士団：

色々と規格外な面々になるでしょう。

しかし、Dies iraeのようなレベルにはなりません。

そんな事したらBETAどころの話ではなくなります。

なので、このお話ではカルト的宗教の集団、そして最高の頭脳集団、または最強の武力集団、という位置づけで踊ってもらいます。

フルメタのアマルガムのような、ミスリルのような組織…でしょう
か。

いずれにせよ規格外な事には変わりありません。

しかしまあ、榊さんといい内海課長といい、とんでもない頭脳を天
木家に置いちゃいました。

というか、Dies iraeとか、こういう有能？キャラがいな
いとマブラブの世界ってつくづく詰みなんだなって思います。

…ただ、天地無用！のキャラを入れたら一発で終わりますよね。
彼らは今回の作品にはほぼ出させません。

それでは。

第10話：狂気の産声（前書き）

幼少期これで終わります。

連日投稿で長いです…

第10話：狂気の産声

8：10 学校の門が開く時間。

5分もしない内に生徒が次々と登校してくる。

ある者は徒歩で、ある者は自転車で、そしてまたある者は自動車で。

ただ、今日の学園の様子は少しおかしい。

警備員がいるのはいつもと変わらないが、制服、黒のスーツ姿の警察官が外堀に沢山いる。

耳に手を当てたかと思えば、皆急に辺りを見渡し、警戒し始める。

すると、白バイ3台、パトカー1台に先導されて赤色灯を上げた黒塗りのセダンが2台、後方にはパトカー1台が、1台のセダンを守るようにして門の前に止まった。

車からは完全武装した警官が数人出てきたかと思えば、サングラスをかけたスーツ姿の厳つい男達がわらわらと出てきた。

彼らは、周辺の安全確保をしたあと、一人の子供を守られるようにして門をくぐる。

天木一貴は先日の葬儀場”襲撃”事件により、以前から天木家はVIPとして国に認定させていた事もあって、警察の警護対象となった。

誰の襲撃なのかは未だ明らかになっておらず、マスコミは極右テロリストの犯行と報道している。

しかし、武家には、天木一貴がナチスのシンパに狙われたという噂が流れており、天木家が脅迫を受けているという話で持ちきりだ。

真偽の程はわからない。

なぜなら天木グループは未だに正式な記者会見を行っていない。
一貴のクラスではその話で盛り上がっていた。

その中で赤い斯衛の服を着た2人組は内心穏やかでない。

怪我はないのか？重三郎様の死は精神的に辛くないか？

そんな言葉ばかりが頭に浮かんでくる。

月詠マヤ、マナは決闘をした後、一貴とはこの1年間、比較的良好な関係を築いている。

葬儀に行こうとしたが襲撃の報が届き中止となり、かれこれ1週間以上顔を合わせていない。

良好、と言っても彼女達の一方的な歪んだ愛情表現だが…

「ほら、弁当だ。何故か2つもある。

一つ毒味してくれ。」

昼食の時間になるとマナが一貴の前にぶっきらぼうに弁当を差し出す。

「あら、マナ？」自分で”作った弁当を何で一貴に毒味してもらうのかしら？」

自分という所を強調してマヤは言い放つ。

「うぐっ…」

道理だ。凶星を付かれて言い返せない。

「毒味なら侍従にまかせなさい。

それはそうと、一貴殿。私のお弁当を食べてみてくださいませんか？

私、”花嫁”修業の一環で殿方の意見を頂きたいのです。」

天使のような微笑みに、白い肌を僅かに赤く染めて一貴に尋ねる。

そしてまた、花嫁という部分を強調する。

この聞き方は反則だ。

これを断れる男がいたら、そいつは男じゃない。

あ、うん…と、了承しかけた所で、マナが机を手で叩いて割って入る。

「うるさいぞ！マヤ！毒味ではない、”独味”だ！

独りの人として味を見てもらいたいのだ！！」

うあゝ、無茶言ってるよこの人…と、周りの空気が伝えてくる。

「あら、独りの人とはどうゆう事かしら？」

揚げ足を取り、2人の間には火花が散り始める。

それからあーだこーだと口論が始まる。

「あのおそろそろ昼食の時間が終わってしまいますよ？」

近くに座っていた女の子がそっと声をかけた。

「それもそうだな、一貴はどちらを食べる？」

こうゆう時だけ息が合う二人。

「「っていない!？」」

こうして不毛な言い争いをしている間に一貴は屋上へ避難していた。こんな事は日常茶飯事、クラスの名物だ。

クラスではそれを生暖かい目で見ている人が、羨むようにしているかの2者に分かれる。

といっても彼らはまだ初等科2年。

この学園の教育水準の高さ、否、家庭教育の高さがにじみ出ている。

教室の扉が大きく開けられ、教師が教壇に立つ。その頃には皆席につき静かにしていた。

「皆さん、おはようございます。

突然ではありますが、天木一貴君…さんは今日をもって初等科を卒業します。」

ざわつく教室。

普段ならこんな事はない。

教師は咳払いをしいったん場を沈める。

「皆さんが動揺するのは、無理もありません。
実は私もたつた今聞かされ驚きました。が仕方のない事です。
最後の挨拶という事で、本人が来ています。」

天木：「さんどうぞ。」

扉の方に声をかけ、教壇を空ける。

すると2人のサングラス、黒のスーツ姿の男が入り全ての窓、カーテンを締め、教壇を挟むようにして手を後ろに組み立った。
そして、スーツを着た一貴が入ってくる。

「皆さんおはようございます。」

このような形でお別れをするのはとても心苦しいです。

先週私の父が亡くなり、私が天木グループの会長となりました。

学業は高等学校卒業程度認定試験を合格していますので、何も問題はありません。

「…そんな事はどうでもいいですね。」

自嘲気味に笑ってみせる。

端から見るとすごく痛々しい。

「先日、葬儀途中、襲撃を受け、これを理由に政府から警護対象者として認定されました。」

私がこの学園にいる事で皆様にいらぬ危険にさらすのは私の本意ではありません。

ですから…私は一足先に卒業します。」

敬語で話す一貴を見て、皆は何となく納得した。
もういつもの一貴には会えないのだと。

「みんなには…いえ、皆様に会えて本当に良かったです。
本当なら…仮定の話にしても意味がないですよね。
本音で話して、楽しんで…
本当によかった!」

敬語と友達口調がごっちゃになっている。

「ありがとう!!」

逃げるようにして外へ出て行く一貴。

「待って!」

男の子が声を上げる。

「俺たち…また会える…よな?」

黒服がドアを開けて退出を待っている。
しかし、立ち止まって彼と月詠達、そしてみんなを見渡して一言だけいう。

「きつと」

そうして一貴は出て行き、クラスには静寂が訪れた。

門を出ると内海がいた。

「か・い・ちよ!」

へらへらといつものように笑っている内海が手をふっている。

「仕事はどうしたのですか？」

若干苛つきながら問う。

聞いても無駄だがどうせ黒崎に投げているに決まっている。

「いやだなくばかあね、会長が心配で飛び出して来たんですから。劣いの言葉があっても良いじゃないですか。」

嘘に決まっている。

無視して車に乗り込もうとした。

護衛を待たせても悪い。

「ま、まっってくださいよ。」冗談ですから。」

一緒に乗り込んでくる内海。

良いのですか？と護衛が聞いてくるが、是、と答えるしかない。理由もなくこうやって行動するのはありえない。

車はゆっくりと会社に向かって発進する。

「最後の別れはどうでしたか？」

というか、会長さんなんだからもつと堂々としてくださいよ。」

「：そんな与太話をするために貴様はここに来たのか？」

そのために給料を払っているのではないぞ、私は。」

普段とは違うきつい言い方をする。

はつきり言って八つ当たりに近い。

一貴も自覚している。

「ひえ〜、怖いなあ〜会長！」

わざとらしいリアクションをとる内海。

ため息をついて、片手でこめかみを押さえる一貴。

「わかった、すまなかった。

本当になんの用なんだ？」

堂々としろとは榊にも言われていた事だ。

改めて反省して疲れ気味に再度聞く。

「それはね。」

にんまりと笑みをこぼしたかと思ったら、カチリッと脇腹辺りに音がした。

「どうゆう事」

一貴はとたんに目を細めて、ドスのきいた声を出す。

「どうゆう事だ？貴様。

私に銃やなんやの脅しはきかんど。

樹雷流武術をなめているのか？」

内海は若干冷や汗をかいている。

「ははははっ…」

乾いた笑いをする内海。

「冗談でやっているのか？

笑えんぞ。」

再度睨みつける。

「会長さん、ほかあね、会長さんが好きだし、前会長は尊敬もして
るし感謝もしている。」

でもね、それ以上に手段の為には目的を選ばない人間なんだ。」

「何が言いたい？」

「僕は前、リチャード・王って名前で、まあ、ある組織の幹部をや
ってたんだ。」

今は違うけど。」

んで、当時『黒の騎士』とも名乗っていた。」

「それがどうしたっ！」

痺れを切らすように低い声で小さく怒鳴る。

運転手とはガラスの壁が引かれており声が聞こえず、こちらの様子
も見えていない。

直ぐにでも彼を殺す事は容易いがこの行為の理由が分からない。

「焦らないでよ〜会長〜。」

黒の騎士って上層部に対する嫌味で名乗ってたんだけど、それが
ばれて公安にパクられそうになってた所で重三郎様に助けられた。

「なんで、そのあと僕が逮捕されなかったと思う？」

「…。」

父がその上層部の一員だったから？それともそれを上回る権力者だったから？」

「流石会長！ほぼ正解！」

その上層部の組織名は…。」

と言おうとしたところで会社に着いたようだ。

「会長、続きを聞きたいなら僕の事チクらないでね

一人で会長室にきてねん」

銃を懐にしまい先に内海は外に出て会社に入っていく。

少し一貴は考えた。

しかし、好奇心には勝てず外に出る。

会社内の警備は万全、という事で警官には納得してもらい外堀の警備を頼んだ。

会長室に入る前に動きやすい赤い斯衛の服を着がえた。

念のため短刀と銃を腰に忍ばせ扉を開ける。

中には内海が一人変わらぬ笑みのまま不自然な位置に立っていた。

室内は変わりにない。モスグリーンのカーペットに幅の広い机。

米大統領執務室と言うより別次元の露大統領執務室を模した感じだ。

不思議に思いつつも戸を閉めると、勝手に鍵とカーテンが閉まり電気が付いた。

それ自体が異変なのだが、この部屋の空気がおかしい事に一貴は気づいた。

多くの人がいる、そんな感じた。

「会長、机の前に立ってください！」

内海を睨みつけつつもその言葉に従う。

立つと扉の前の空間が歪んだ。

いや、それだけではない、一貴の周りの空間が全て歪んだ。

そしてバサリ、と布のこすれる音が響き、ナチス親衛隊の軍服姿の人間が部屋を埋め尽くすような人数で現れた。

「Achtung！」

トリファが声を上げた。

彼だけは何故か神父姿だった。

「「「Sieg Heil! Viktoria!」」」

誰一人目を合わせず右手を上にする独特の敬礼をしてきた。

ただ言える事はこいつらの目つきは尋常だ。

怯えるような、尊敬のような…そんな目つきだ。

彼らを観察していると、トリファとブレンナーが一步前に出て土下座をした。

「知らずとはいえ先日のご無礼をお許しください、閣下。」

「知らずとは？」

その前に君たちは一体何なのだ？」

姿勢を崩さずトリファは答える。

「我々は聖槍十三騎士団と申します。内海は我々の組織の中層幹部です。」

そういつと、組織について延々と話し始めた。

要約するに、紀元前からウイスパードという天才達が天の声を聞き、様々な兵器を作り出し、救世主と共に樂園に行こう、という宗教集団らしい。

今まで世界のあらゆる国の背後で暗躍しており、今は南極に基地があるそうだ。

「また、戦術機の考案も私達でして、元々は対人を想定した”アイム・スレイブ”という人型兵器なのです。」

「オルタナティブ計画は我々の教義を見直す計画でして、その前身のデイグニファイド13は我々聖槍十三騎士団の事を指します。」

という事はなんだ。

BETAを呼んだのはこいつらなんだな？

「呼んだというのは少し語弊がございます。」

彼らは来るべくしてきたのでございます。そして、それを打ち倒すのがあなた様でございます。」

ウイスパードは最強の兵器を創るのだろうか？

それならなぜ人類全てにそれを渡さない？

「まだ兵器が未完成なのでございます。」

戦術機が第一次大戦の複葉機とすると、我々の所持しているのは超音速ジェット機なのです。

改良もままならず、乗れるパイロットも数少なく、今のところ3人しかおりません。

これを仮に公表したところで今の人類にはとても扱える物ではないかもしれません。

実際それに近い情報を出しましたが結局今の戦術機程度にしかありませんでした。

例外として内海、そして閣下の考案した改造型F-4、そして電磁収縮筋があります。」

そこまで聞いて一貫は苛つきながら口を開ける。

「それで、私が救世主だというんだな？」

「そうです。間違いありません閣下。」

即答した。

「では私の命には何でも従うのだな？」

「その通りでございます。」

またも即答した。

「私は私自身が救世主だと思わないし、君たちが言う大いなる力についても理解できない。」

「君たちが私に付き従うという理由はよくわかったが、はっきり言って信じられないし、信じたくない。」

「まだその時では無いのです、閣下。」

「それも聞いたが、私は生憎、特定の宗教を信仰している訳ではないのでね。」

その気持ちはわからん。

だから私は貴様らの忠誠度を試したい。」

彼らに会って2時間以上話しているが未だに敬礼しており微動だにしない。

彼らのそれは真実だという事を証明する一つの証拠でもある。だが、彼らの身勝手ともいえるメシア信仰には憤りを禁じ得なかった。

「デイグニファイド13といったな？」

ずいぶんと昔の組織のようだが生き残りはいるのかな？」

「はっ！こっこー！」

ペルシヤ的な風貌をした50代の男性が前に出てきて膝を下ろし頭を垂れる。

「名は？」

「聖槍十三騎士団 黒円卓第二位 トバルカイン・アルハンブラ」

「よろしい。」

ならば、今回の襲撃騒ぎ、そして私を欺いてきた事の無礼、貴様の死によって全てを不問にする。」

これは八つ当たりだ。

「わかりました。」

なんの迷いもなくダガーを取り出し鞘から抜く。

「お目汚しをお許しください。」

Sieg Heil! Viktoria!

首に突き刺し回すように掻ききる。

首はカーペットの上に転がり落ち、血が天井まで吹き上がった。

狂っている。

一貴も、そして、その事になんの感情の起伏を表さない彼らも。体内の血を全て吹き出した身体はそのまま前に倒れ込んだ。

一貴の顔には血しびきが付いていた。それを人差し指ですくい取りなめる。

ああ、越えてはいけない線を越えてしまったと実感しながら。

「貴様らの忠誠はよくわかった。」

眼鏡を投げ捨て、踏みつぶし、おぞましい笑みを浮かべる。

それに答えるようにトリファ達は立ち上がり、白いナチスの制服と制帽を差し出し、彼に敬礼をする。

それを受け取り一瞬で着込む。

黒いネクタイをきつめに閉めた後咳払いをし頷いた。

「よろしい、ならば戦争だ。」

征くぞ 諸君。」

一 貴もナチス式の答礼をした。

第10話：狂気の産声（後書き）

デイグニファイド13、本来は12です。
都合上捏造しました。

オルタ”ネイ”タイプ…？オルタ”ナ”タイプに変更しました。
ちよと違うという雰囲気づくりです。

それはそうと内海専務、凶変しましたね。

これがやりたくて内海さんは登場した言っても過言ではありません。
これからも色々活躍してもらおうのですが…

月詠コンビは1年間でれっででした。

本当はその話を作ったのですが没しました。

理由は、初等科の人間がそんな事出来るかっ！という考えです。
なので脳内補完してください…

いずれ機会があれば成長後の話で入れようと思ってます。

突然の出来事で今回発言権を得られませんでした。

シヨックで頭真っ白です。

男の子、女の子…名前無くてゴメンね！

トバルカイン…噛ませ犬になってしまいました。

伊達男好きなのですが、ごめんなさい。

一身上の都合で2週間程更新する余裕が無くなりそうなので、書き
ためてた話を出しました。

1話分ですけど…。

次回から新しい章（Show）が始まります。

それでは。

説明無用！閑話：もしも　　がそのまま介入したら（前書き）

電波受信！

暇な時間に書いてしまいました。

本編とは関係ありません。辻褄が合いません。

説明無用！閑話：もしも　　がそのまま介入したら

「うん？ここは？」

周囲を見渡すと見慣れた艦内だった。

「秋桜、モニターを出せ。ここは何処だ？」

ぶうん。

360度全周囲モニターが目の前いっぱい広がる。

『マスター、地球の軌道上を航行しております。』

ただ、因果律が狂っているようです。』

「因果律？なんだそれは？」

説明によると自分がいた世界と異なる、つまりは異世界に来ているようだ。

あのマッドめ…俺をこんな所に飛ばすとは何を考えているんだ？

「あゝ、とりあえずネットワークを復旧させよう。」

全周囲探索開始。」

『うあ、キモい！』

「何が？」

『キモい生命体がユーラシア大陸を占領しています。』

秋桜はその映像を拡大してモニターに映し出した。目玉が飛び出た異性体がこちらを見つめている。

「キモ…、BETA？なんだそりゃ？」

地球圏内のネットワークを復旧したところ、BETAと呼ばれる生命体が地球を侵略し、地球人が滅亡されかかっているという情報が出た。

「おいおい…瀬戸様、というより樹雷はこれを公認しているのか？
コンタクトをとってみる。」

『いえ、先程申し上げたとおり因果律が狂っているため樹雷は存在しておりません。』

「この世界では、このキモい奴らが宇宙を占領し、ケイ素系生命体
が実権を握っているようです。』

「ケイ素系生命体？なんであいつらが？」

『訪希深様の実験の一つかと…』

「そうゆう事ね。」

三命の頂神は宇宙を、世界を創造した存在で高次元体呼ばれる。有り体に言えば”神”だ。

こいつらは様々な世界を管理し、様々な可能性を探究してきた。以前、訪希深が創造したある次元で”Z”なる強化人間が生まれ、天地さんを殺そうとした事件があった。

「で、何で俺がこんな所にいるわけ？」

『さあ？私は存じ上げません。』

むふう。

面倒な事になった。

いくら俺だからといって次元を越える事は出来ない。

『マスター、キモい奴らが日本を攻撃しています。』

「日本を？何処？」

『佐渡島です。』

動向をみていると、日本を攻撃しているのではなく、軍が佐渡島を
取り返しているようだった。

「とりあえずキモいな。」

『ですね。』

銀河法では、地球のような発展途上の文明と接触したり、自らの持
つ技術を開示してはならないとある。

しかし、ここにはそのような法律はない！

『マスター…よからぬ事を考えていますね？』

「いやいや、俺はただ単に日本人の為を思っただな。」

『…でも、一方的な蹂躪は見られませんね。』

話している途中、一部の人型兵器がBETAの集団に飲み込まれようとしていた。

「なら…」

彼の足下が光を通さぬ暗闇に染まり、そこに溶け込んでいった

「柏木ッ！貴様だけでも離脱しろッ！」

>> 馬鹿言わないでください！ハッチは守っていますから早くッ！
<<

かといってこれがうまくいくとは限らない。
このままでは私も…そして柏木も…

>> プランドに従って、エコー艦隊がA-02への支援砲撃を開始するわ<<

香月博士の無線が突然入る。

「！」

>> 跡形もなくという訳にはいかないけど、何もしないよりはマシでしよう。

レーザー種が出てくる前に済ませたいわ。

早く脱出しなさい！<<

「りよ、了解ッ！」

こうなったらいち早く脱出しなければッ！

伊隅大尉はリフトに素早く乗り外部の脱出を試みる。

>>気安く近寄るんじゃないよッ！<<

>>柏木！伊隅を乗せたリフトが上がるまで30秒よ！<<

>>了解ッ！

うおおおおおー！<<

>>しまった！このままじゃ大尉が！<<

>>ッ！<<

無線の様子がおかしい。

やられたのか！？

「柏木ー！ー！ッ！？」

「男が：男一人でBETAを蹂躪してます…」

>>な、なんですって〜！<<

男は何千というBETAを殺戮した後、突然立ち止まり、宙に浮いた。

宙に浮いているのである。

「数が多すぎて虫が退治できない、そんなとき！

こんなものがあればとっても便利！

特製ビット型ハドロン砲〜」

てってれ〜

何故か効果音が流れた。

「ねえねえ、そんな高性能兵器お高いんでしょう？」

その男は高い声を出し主婦のまねをし始めた。

こんな状況で漫才をしている。

「奥さん〜、今回だけは特別出血大サービス！

なんとこの超小型ビット500個セットでなんと！

な、な、な、なんと！8880円！！」

ええ〜！！

誰だ驚いている奴！

>>伊隅、なによこれ？<<

「わ、わかりません博士。」

BETAがめがけて接近しているというのに漫才は続いている。

「やつすゝい!!」

「今から10秒間だけの限定価格です！是非是非お買い求めを」

そう言うとBETAに視線を向けた。

「早速お買い求めのお電話を沢山頂いております。
その数1000万！」

「これはもう、沢山プレゼントしませんと！
さてさて糞BETAども、たらふく食べな。」

彼の背から小さな球根の形をした物体が大量に飛んでいった。
それに向かって異常な数のレーザーが空中に放射された。
しかし…

「ばゝか。そんな低出力のレーザーで落とされるかつ！
ちよび丸1000体持つてくるんだな！」

ラザフォード場のようなものがその物体を守り、レーザーが当たらない。

「夢を見ているのか…私は。」

ため息が出る。

「バイバイ！屑共、チリはチリに帰れ。」

瞬間、空中からレーザーが、ばらまかれBETAを溶かしていった。しかし、BETAはまだハイブから出てくる。

「流石に面倒。秋桜。あそこに打ち込め。」

ハイブを指さし誰かに声をかけ始めた。

「出力は…任せる、地球が吹き飛ばないようにな。」

「了解しました、出力3%、50%圧縮して発射します。
カウント5。」

砲身に熱がこもり始める。

「4、3、2、1、発射。」

小さな球体が地上に落下していく

その日地上全てのハイブは地球から消滅しましたとぞ。
チャンチャン

説明無用！閑話：もしも　　がそのまま介入したら（後書き）

本編を書く余裕は無かったのですが、ちょっとした小ネタを書く時間とはれました。

章が終わることにこんなネタを投下していこうかと思えます。

次回更新は、やはり1週間後になりそうです。

それでは。

第1話・若さ（前書き）

筆者は右翼でも左翼でもありません。

しかしながら、今回の話はイデオロギー色が強いです。

読んでくださる方の気分を害するような内容を含んでいる可能性があります。
あります。

注意してください。

第1話：若さ

1983年、日本国内はお祭り騒ぎの真つ最中だった。次期政威大將軍、煌武院 悠陽殿下がこの世にお生まれになった。

今、陸軍、海軍、斯衛軍の三軍が大規模な観閲式を行っている。脂肪が限界までそぎ落とされた武士が次から次へと行進して行く。皆の眼光は鋭く、一つ一つの動作には一切の無駄が無く洗練されている。

正に威風堂々だ。

陸軍分列行進曲にのせてF-4J改が編隊を組み、轟音と共に目の前を通つてゆく。

会場からは大きな声援と共に「日本帝国万歳！！」と声が上げられた。

それを冷ややかに見ている一団がここにいる。

「まったく暢気なものだ。」

天木一貴は頬杖をつき、足を組みながら呟いた。

「会長、そんな事を言つては駄目ですよ。」

日本人にとってはGood Newsなんだから。」

少なくとも、この厭戦気分を和らげるためには必要な行事だと思うけどな。」

相変わらずニタニタと笑っている内海専務はそう答える。

「国民は本当の事を知らない。」

いや、知る必要がねえのかな？

坊主、こいつぁおめえさんと同じだな。」

榊専務はぼやく。

これは日本帝国の最重要機密である。

煌武院家では「双子は世を分ける忌児」として、妹の冥夜は遠縁の御剣家へ養子と出された。

「日本の最高指揮官が、あほらしい風習を信ずる…か。」

「我が国は神国なり」馬鹿か貴様らは。

神国であるならば、その神を守護する阿修羅は何処にいる？
何処にもいない。

「我が帝国には神がいる」「神風が吹く」
ふざけるな。

神とあがめる存在にそんな力があるはずがない。
あつてたまるか。

我々日本人は第二次世界大戦の敗北後、何も学ばなかった。
神は死んだ。

いや、我々が殺した。

ただただ、有り難いものだと思っている。

もし仮に本当に神を信じ、その存在を公認するのであれば、何故、
我々はその神を守るために力を結束させないのか？

本当は誰も信じていない。

この矛盾の中で日本人は生きている。

日本人は本当に卑怯だ。太古の昔からそうだ。国の頂点にはいつも”神格化”された存在が有り、その背後で国を動かす政治家達がいる。

肥え太った豚共がそれを人形のように操り、国の実権を握ってきた。全く持つて腐っている。

私は預言する。

この先BETAが日本本土に上陸する事はほぼ間違い無いだろう。その時この”神格化”された存在が戦線を鼓舞し、日本帝国国民は結束する。

”危機が訪れた時”に、肥え太った豚共も。

そしてその存在が死ぬまで戦い続けるだろう。何が起ころうとも。

我々は我々自身の魂をその者に預け、戦うのだから当然だろう？そしてその魂を預けられた本人は、全日本の、一億人の期待を一人で背負って戦い、常に光を示し続けなければならない。

残酷な話だ。

誰もその者の代わりは出来ない。

そして、誰もその者を助ける事をしない。

なぜならその者は”神”なのだから。

そして一度平和が訪れれば皆、神を信じなくなる。

神を必要としなくなったからだ。

全く卑しい民族だよ、日本人は。

「だからこそ、その風習を続けなければならない。

でなければ、自分の存在意義を確立できないから……。」

頭の中で自己完結し、ぼそりとつぶやく。

すると、突然背後からトリファの声がした。

「その通りです、閣下。我々は神を信じていない。

信じているのは高次元体。抽象度の極めて高くなった存在。大いなる意志。

それは”我々”であって”我々”ではない。

そして、それが神なのです。

だからこそ、その御使いであり、我々の救世主であらせられる閣下のみを信じているのでございます。」

榊と内海は若干こわばった顔をした。

それもそのはず。

ここは日本の要人、さらには煌武院家が来ており、厳重な警備が引かれている。

にもかかわらず、この招かれざる客はたやすくそれを突破し一貴の背後に立っているのだから。

「その根拠がウイスパード、か。」

「当の本人は動じない。」

「左様でございます。」

トリファの言葉を聞いたと同時に、僅かに微笑み言葉を返す。

「貴様らは狂っている。そしてそれを従える私自身も狂っている。」

彼もまたそれを笑みで返した。

「それは私達にとっては褒め言葉でございます。」

我々は狂信者ですから」

「で、坊主。奴は何しに来たんだ？」

観閲式が終わり会場を出て行く3人組。

通路は赤いカーペットが敷かれており、壁は純白、まるで宮殿の様に整備されている。

榊は、先ほどのトリファが来たことについて一貴に質問した。

彼はトリファ達の事をあまり良く思っていない。

自分が開発、正確に言えばリバースエンジニアリングした物を日本仕様に改良したF-4改を複葉機扱いした。

これは技術屋である榊のプライドを大きく傷つける言葉である。

そして、今まで寝る間も惜しんで開発した、自分の息子とも言えるファントムをゴミとまで言った。彼は本当に許せなかった。

「これだ。」

一貴はそのような経緯を知りつつも、言葉には出さなかった。聖槍十三騎士団の基地には一貴も未だに行っていない。トリファ達は是非に、と誘ってくるが護衛の目を欺くことも出来ず、それよりも本社の経営の方が忙しい。そして外付けHDDを強調するように見せつけた。

「サンタフェ計画。」

米陸軍が極秘裏に進めている新兵器開発計画の情報だ。」

「そんなもん手に入れてどうする気ているんだ？」

「孫氏いわく、敵を知り、己を知れば、百戦危うからず、ですね、会長。」

内海はわかっている、そう思って少し胸を張りながら説明を始めた。

「まあ、そんなところだ。」

「これは、通称”G元素”と呼ばれるあれを兵器転用する話で…ッ
！」

突然、目の前に女性が飛び出してきた。

本来こういった情報は外部に漏らさないように自室や、車の中であることであって聞かれる可能性があればしてはならない。

一貴は自分がしかした事に後悔しつつも、腰に差していた刀に手

をかけ、それに2人も同調し行動に移した。

「一貴!!!」

声に聞き覚えがあり、3人とも動きを止めた。目の前に現れたのは、月詠マヤ、マナだった。

彼女らも一貴同様、赤の斯衛の服を着込んでおり1年前よりは背がのびていた。

彼女たちは慈しむような眼差しで一貴を見つめる。

「一貴殿、大丈夫なのか？」

突然いなくなってしまうって、私たちは心配したのだぞ……」

最初に声をかけたのはマヤだった。

「それに今は何をやっているのだ？」

煌武院悠陽殿下の護衛をすると聞かされているが……」

マナは突っ込んだ事を聞いてくる。

一貴は迷った。

煌武院家の一件は少しばかり思っていることがあるため、正直なことは言えない。

故に少しはぐらかすことにした。

いつものスマイルを作り彼女たちを見つめる。

「いやあ、二人とも暫く会わないうちに美人になったな!」

ピクツと跳ねた。

一貴は気づいていないが、月詠達の頬は少し赤くなっている。

内海、榊は上の歯を出し、ニヤニヤと笑って後ろに下がった。

「マヤは眼鏡を変えたのかな？ シャープな顔立ちになって、よりきれいなっただね。」

そ、そんなことは…と呟いて、しきりに眼鏡の縁を上げたり下げたりしている。

「マナは雰囲気が変わったな、前より落ち着いて、女性らしい美しさが強調されて…」

…ツツツ、俯いて肩を振るわせるマナ。

一貴が最後まで言葉を言わないうちに、一瞬でファイティングポーズをとり、ゼロ距離になる。

一貴は失念していた。

彼女が攻撃的であることを…

「フゴツ!!」

見事な左ボディーブロー決まる。

波動が彼の背中まで見える勢いだった。

もしこれが一貴でなかったなら一発KO、間違い無しだ。

「わ、私は前から女性だし、落ち着いていたっ！」

テールライト並に真っ赤になったマナは腕を組み、そっぽを向きながら抗議する。

「そ、それに…話をはぐらかすなっ！」

マヤも同じような姿勢で訴えてくる。

ばれていたか…、そう思いつつも意識を保つ一貴。

「うぐううっ…」

あのなあっ！も、もうちょっと手加減するのは出来ないの、か…」

しかし、まあ、いつみてもすごい光景だな。

確かに 確かに

と、後ろではコソコソと話し込んでいるが、当然一貴には聞こえていない。

「柄にでもない事を言うからだ！馬鹿者っ！」

スコーンツ！

頭にグーパンチがクリティカルヒット。

マナも容赦が無い。

「いてええ！これでも天木家当主だぞっ！

丁寧扱え！敬え！アホどもがあ！」

「内海：地が出てますぞ当主」

「榊：最近は命令口調ばかりだったなあ。」

「うるさい、親の七光り。」

「内海：七光りではないけど…」

「榊：ま、そう思われても仕方ない節はあるな、重三郎様もかなり甘かったし。」

「お前の方がうるさいわ！」

「いつもいつも学校ではこんな感じだったな、まったく！」

「「はあく。地雷を踏むのが得意だな」」

「2人は回避姿勢を取った。」

「「！」「」」

「「そういえば、一貴。1年前突然学校を出てったな？」

「何で私たちに一言もなかった？」」

「じゃれていた雰囲気は消え失せ、月詠達の背後には黒いオーラが出ていた。」

「目は白く光り、まるで獲物を捕らえるかのような姿勢だ。」

「なっ…、それは、突然だったのだ！あれは仕方なく…ッ」

「柗ッ！内海ッ！くせ者だ、であえであええッ！」

「形勢不利と察知したが、いつものこと。」

「あ 僕、黒崎君に呼ばれているんだった。」

「シゲえ！あのフロントムの機動はどうなってんだッ！」

「整備班全員ぶち殺すぞ！」

「内海は車のキーをくるくると回しながら出口にスキップしていく。柗は通信機を取り出しなにやら叫んでる。」

「お、お前ら…俺はお前らの上司だろ！助けるよ…！」

目を合わせない2人。
後ろには恐ろしい鬼が…

「「ちょっとお話ししましょうか、か・ず・き・ど・の」「

「いやああああああッ！」

一貴は襟を掴まれ闇へと消えていく…

「それで…如何なされたのかな？」

紅蓮の目の前にはズタボロになった一貴が座っている。

ここは紅蓮宅。

客室には一貴と紅蓮しかおらず、目の前にはお茶が置かれていた。

紅蓮は月詠の師匠でもある。

そのため、おいそれと紅蓮の家には入ってこれない。
学校にいた時も避難所としてよく来ていた。

「い、いえ、ちょっと猫に引っかけまして…」

大体の検討はついている、紅蓮。
哀れに思ったが口には出さなかった。

「…、心中お察しいたします。崇宰様」

「！」

崇宰…元の名字だ。

紅蓮は知った。

重三郎が死ぬ1日前、彼の家に通の手紙が届き、そこには一貴の
本当の親の事など様々な事が書かれていた。

「やめてください、紅蓮おじさん。私は天木を継いだ者。」

何となく察した一貴は、それを遠回しに非難した。

「…、失礼いたしました。」

紅蓮も元よりそのように呼ぶつもりは無かった。

決心したような顔をし、紅蓮はいつもの”おじさん”の顔に戻った。

「では、一貴！久々に飯でも食っていけっ！」

その場から立ち上がり、背中にビンタを食らわす。

「い、いたっ！あのですね…」

話しながら何処へと動き出す2人。

「はっはっはっ！その様子だと”また”月詠達にやられたのか！」

「ええ…何故か私に暴力を振るってくるのですよ。」

”あの時”から殺気は無くなりましたが、事あるごとに、いらぬ争いごとを持ち込んでくるのです…。

用があるなら、ハッキリ言えばいいのに。」

足を止め、紅蓮の顔色は若干曇った。

「…一貴よ、本気で言っているのか？」

「は？どつという事ですか？」

ゴホンッ！、大げさに咳をし再び歩き出す。

「いや、何でもない。そういう事は本人達の間で解決する問題だからな。」

「はあ…」

一貴は困ったような声を出した。

空気を変えるように紅蓮は話を変えた。

「まあ、それはそれなのだが、例の件受けてくれるか？」

次は一貴が足を止めた。

そして、紅蓮の思惑とは違い空気は数段重くなる。

「…、私はかねてより次期將軍閣下の護衛をすると申し上げてきました。」

「…。」

黙って目をつむり彼の言葉を聞く。

「しかし、守るべき殿下は”2人”おられる。

私は同時に2人の殿下を護衛することは出来ない。
なれば、共に帝都城におられるべきであり…。」

「それは出来ん相談だ。」

彼の言葉を遮り、それを否定した。

「紅蓮”中将”も風習を信ずる者ですか？」

そう言つて眼鏡を外す一貴。

赤い目からは怒気が伝わってくる。

「…ッ！お前の言いたいことはよくわかる。

だが、これは決定事項であり、我が国の伝統でもある。

こんな世界的な有事の時に、国の上層部で混乱など起こしたくはないッ！」

彼の背景を知るからこそ言葉を選んだつもりだった。

「それが本音ですね…。」

確かに貴方の仰る意味もわかってます。

でも、それでも私は、紅蓮おじさんには賛成してほしかった。
それだけです。」

一貴も紅蓮が反対する理由はわかっている。

しかし、これが若さ故の過ちなのか、苦しい質問を大人に投げかけていた。

空気も悪くなってしまう、双方共に食事をする気分にはなれない。

「食事はどうする？」

紅蓮から切り出した。

「いえ、今日は遠慮させていただきます。」

戸惑いながらも、一貴は帰る事を選んだ。

「そうか…。」

久々に会った紅蓮は残念そうな顔をする。

「突然お邪魔して失礼いたしました。
またいずれ。」

「ああ、今度はゆっくり来い。」

「はい。それでは。」

一言言った後外へと出て行った。

それを縁側から遠い目で見つつ紅蓮は呟く。

「重三郎様…私はどのように返事をすればよかったのでしょうか…。」

L

第1話・若さ（後書き）

如何だったでしょうか…

筆者は手に汗を握っております。

先行きの怪しい滑り出しとなりました…

それでは。

第2話・榊専務の苦悩と巨神兵（前書き）

巨神兵…。

本編にはあまり関係ありません。

ではなぜタイトルにしたのだろうか…。

でも、一体ほしいな。

第2話：榊専務の苦悩と巨神兵

「残念ながらゴミだよ、これは。」

コックピットから出た一貴は厳しい言葉を放った。

「会長、それは言い過ぎですって。」

内海は乾いた笑い声を出しつつ、一貴の発言をフォローした。それを聞くのは一個中隊のF-4J改パイロット、そして整備員達だ。

彼らは赤の斯衛軍強化装備を着る天木に対し、先ほどまでは尊敬、そして畏怖の念をもって敬礼をしていたが、先の発言によって、憤りへと変わった。

それを一貴は察知し、戦術機から降りつつ、言葉を改める。

「言い方が悪かったみたいだな。戦術機そのものの挙動が屑だ。

私の行動にいちいち干渉してくる。これでは私が操縦しているのではなく、機体に操縦されている気分だ。」

さすがに耐え切れ無くなり、大尉の階級を付けた一人の衛士が、皆の言葉を代弁するように一歩前に出た。

「しかし、それはパイロットを守るための機能ですって……」

制止したのは大佐の階級章を付ける榊 清太郎専務。とある理由で今は軍人となっている。

「黙っている、榮二。」

巖谷 榮二 帝国斯衛軍大尉。

この中隊の隊長だ。

「すみません。」

中隊の前に立ち返礼をしたあと、皆を休ませた。

一貴には階級章が無い。

それもそのはず、彼は9歳であり軍に入隊すらしていない。

しかし赤の斯衛であるが故に、このような態度を皆とる。

そして軍人ではないため、非公式に機体に乗った。

何故乗れるのか…それは”企業秘密”というやつである。

一息ついたところで大尉を見つめ、話し始める。

「その意見はもつともだ。

だがな、過保護なのは乗り手を殺す。

レーザー種に狙われた場合、機体がオートになる。これの手動解

除が必要なのが1つ。

あとはOSだ。」

一貴は今、F-4J改の試乗についての意見を求められ、テストパイロット達であったこの小隊に感想を述べている。

「実戦で積み上げてきたデータですよ!？」

今まであらゆる衛士に乗ってもらい、高評価のみをもらっていた彼らだが、それを真つ向から否定されてしまい、動揺してしまっている。

「聞こえてなかったのか、榮二。3度目はねえぞ。」

低い声で整備服を着た榊は、腕を組み俯いたまま座っており、諭すようにいった。

「す、すみません。」

「…。」

機体自体の性能に関しては、今となつては何も言うことは無い。そもそも国産に踏み切ること自体が無謀だったのだからな。」

「…。」

それについては彼らも思うところが合ったのか、榊の言葉からか反論は無かった。

「で、だ。」

OSだが、戦術機そのものが操作されるシステムになっている。つまりだな…言葉にしづらいが、元々、戦術機的设计思想は一人の力では出来ないことを機械に補佐してもらう事にある。

鎧が良い例だと思うが、それを纏うことによって生存率が上がる。生身の体では弓や刀に対する防御性が著しく欠如しているからな。ここで二つの考えが出てくる。

1つは鎧をつけたまま効率の良い動きが出来るように訓練する。

もう1つは、鎧を軽量化しつつも防御力を維持する。

言っている意味がわかるかね？」

「ええ。」

つまり天木社長は戦術機の発展を前者…と仰りたいのですね？」

「そつだ。」

効率の良いことに見えて実は非効率だ。
人間が持っている本来の能力を制限する形になるからな。」

「ですが、」

「またもや反論をしようとしたところで榊は立ち上がり、大尉の胸ぐらをつかんだ。」

「てめえ！3度目はねえって言っただろ！」

「ぶち殺されてえかつー！」

「まあ良い、榊。」

手を前で横に切り、それを抑える。

榊もそれに従い、丸い椅子にかけ直した。

「極論するならば、人間の体をそのまま戦術機の大きさにしてだない。。」

「巨人化した上で鎧を着け、ブースターを付け、敵に見合う武器を持たせてくれればそれで良い。」

「そこまで言った後、思い出したように満面の笑みをして言葉を続けた。」

「そう。」

「言わば巨神兵、と言ったところか。こんな兵器にしてほしい。」

「「「巨神兵??」「」」

聞き慣れない言葉に一同が聞き直す。

それを驚いた顔をして一貴は受けた。

「巨神兵を知らないのか？」

「口が、くばあで、パウツで、キノコ雲だぞ？」

「本当に知らないのか？」

「私はあれに憧れて造ったのは良かったのだが、強すぎて星を一つ潰すところだったぞ。」

「あっはっはっはっはっ！」

「大丈夫ですか？会長？」

内海は冷や汗をかきつつ一貴に尋ねる。

しかし、彼はおかしくなっただどころか、肌の血色が急に良くなっているように見えた。

活き活きしている。

「私は大丈夫だ。」

「うん、懐かしいなあ。マッドにどやされたっけな。」

「オーマは劇中では不完全だったけど、完璧にしたらパネエっての！」

「パネエ？」

「口調までも狂ってきている。」

「榊までも心配するような顔をした。」

「この俺が改良したんだから間違いなど無い。」

「プロトンビームを100発撃ったところで肉体の腐敗は起きない。」

「ま・さ・に、火の7日間が起きたのも領ける性能になったッ！」

「はっはっはっはっはっはあ？」

「マッドって誰だ？私は何を言っている？」

「いや…私に聞かれても、ちょっと…」

巖谷大尉は困った顔をした。

一貴は周りを見渡し不審がられていることを感じ、大きく咳払いをした。

「ゴホンッ！」

「ま、まあASURRA改を積みめば…」

「「会長！！」「」

内海と榊が大声を出し、その先の言葉を止めた。

「ほあっ！す、すまん。」

「ASURRA改？」

聞き慣れない言葉に巖谷大尉は聞きなおす。

「な、何でもない。確かに良いOSなのだが…」

「ちょ、ちよつと会長！」

内海が止めに入った。

「どうやら一貴は焦っているようだ。」

「何ですか？それは？」

「あゝ…それはだな、」

「坊主！駄目だ！そりゃ言っちゃならねえ！」

「またもや言葉を滑らそうとしている一貴の口を榊が塞いだ。」

「ちょっと！榊大佐！内海専務！」

「あそこまで彼らがテストパイロットとして育てたF-4J改をけなしておいて、自分たちの情報を隠すというのは、少しここでは分が悪かった。」

「それに観念し、息を整えた一貴が情報を漏らした。」

「…ここだけの話なんだが理想のOSを開発してみたんだ。」

「それで…」

「それが駄目だったんだな、これが。」

「内海がヤレヤレ、といったポーズをとる。」

「えっ…」

「確かに理想的で人間の動きそのものになったんだが…」

「榊もあごに手を当ててしみじみと語った。」

「人体をそのまま巨大化したような物だからGが半端なものじゃなくなってるな。」

「だから乗れるのは私と、ゼファー位で…」

それに呼応するように一貴も話し始めたが、

「ストップ！それ以上は駄目でしょ！会長！」

またもや出そうとした。

「えっ！」

驚いた顔をし、眼鏡がずれる一貴。

「えっ、じゃないでしょ、えっ、じゃ！」

今日は帰りましょ！様子も変ですしッ！」

内海は腕をつかみズンズンと格納庫から出て行く。

「内海！引っ張るな！帰るからッ！」

その後格納庫の外では叫び声が木霊したとかしないとか。

置いてきぼりを食った彼らは先の発言に対し、ざわついている。

「ASURA改？ゼファー？巨神兵？」

それに先に答えるように榊は声を上げた。

「お前らの質問には答えてやれねえよ。」

これはウチの会社の機密だ。巨神兵は俺もしらねえが…。」

ざわつきは止まり、うやむやになってしまったが彼らは先の模擬戦のフィードバックをし始めた。

「しかし、まあ、どうしてこうなっちまったんだろうな。」

榊専務は赤く塗られた、F-4J改を見上げながら呟く。

F-4J改、正式名称、82式戦術歩行戦闘機 瑞鶴

開発主任は榊専務だ。

元々彼は帝国陸軍技術大佐、兼、技術廠・第壹開発局部長であった。その彼がなぜ斯衛軍の瑞鶴の開発に携わったかと言えば、77式戦術歩行戦闘機 撃震をライセンス生産する前の曙計画に参加し、戦術機について右に出る専門家は彼をおいていない、という城内省の判断によるものだ。

だが、その要請を受けた彼は当初、この計画参加に消極的だった。戦術機の事をよく知っているが故に、日本の戦術機産業にこれを独自生産するには技術差があまりにも開きすぎていると考えていた。事実、戦術機の専門家が彼一人だけが名指しにされる事が良い例である。

彼曰く、

「もつと米国製戦術機を輸入し研究するべきじゃねえか？
まだまだ、自国生産には早すぎるし、能力もない。

米国が開発してるっていうF-15、頼み込んで配備するのが一番だとおれあ思うがな。」

「さらに言えば、日米仏ソ中英EU…世界全体で戦術機開発。
若しくは、技術共有ってのが世界を救うんじゃないか？」

この言葉は連絡員だった城内省の担当官を困惑させたのは間違いない。

城内省としては”愛国心”のある日本人であれば喜々としてこの計画に参加してくれるだろうと高をくくっていた節がある。

しかしそうではなかった。

結局、榊は”お国のために”と言うことで重い腰を上げ、この機体を開発した。

完成したとき彼は大いに喜んだ。

それ以上に周りは、初の「国産」と歓喜した。

実際は純国産では無い上に、F-4を改造したに過ぎず、お世辞にも性能が良いとは言えない。

77式 撃震を第1世代、82式 瑞鶴を第1.5世代とするならば、来年84年に配備されると言われる、米国F-15は第2世代だとする調査結果が天木グループでは出ている。

この0.5世代の間を埋めるためにはあと「10年」の年月が必要だとの考えが共通認識として生まれたのは言うまでもない。

そして今回、次期主力機の国産開発（耀光計画）についての予備調

査として、天木一貴に非公式でF-4J改に乗ってもらった訳だ。調査方法は統合仮想情報演習システム「JIVES」を用いた一貴の機体一機と、巖谷 榮二大尉が率いるF-4J改テストパイロット一個中隊（三個小隊）の対戦だった。ちなみにJIVESの開発者は一貴と内海専務であり、国際特許を取っている。

対戦結果は…、一貴の勝利に終わった。しかも無傷で…。

それでいてF-4J改をゴミだと言う。

だが、不思議と榊は腹を立てなかった。以前、トリファがこの機体をゴミだと言ったのは正しかったのだと思った。

榊はふと思ひ浮かべる。

自分がF-4J改を「ファントム」と呼んでいることに。

なるほど、言い得て妙、確かに亡霊だ。

米国に負けた我々日本人の怨念、嫉妬の固まりがこの機体を生み出した。

何とも醜い機体なのか…

榊は胸が苦しくなった。

そして手元のメモ用紙に走り書きをした。

「第三世代開発不能、イーグル輸入すべき。」

それを握りつぶし、自室へと静かに戻っていくのであった。

第2話：榊専務の苦悩と巨神兵（後書き）

早めの更新です。

たとえば話は何か変ですね、見逃してください。

一貴君：何か思い出し始めましたね。

私のおじさんが見せてくれた初めての漫画。

それは漫画版ナウシカで、私が小学生低学年の時でした。

その内容はとてもグロテスクで、こんな衝撃的作品を読んだ私は、きつと狂ってしまおうと感じました。

今ではこんな捻くれた人間になってしまいました。

オーマ（巨神兵）よ！

私を父と呼んで空を飛ばうではないかッ！

無論、妻はナウシカで…

まあ、毒の光で自分の体が蝕まれるのは目に見えているのですが、でも本命はナウシカだったりして。

あっ！クシヤナ殿下も…

それでは。

第3話：灯る炎（前書き）

戦術機、武器の一部性能は憶測で書いてます。
公式設定が見あたりませんでした…

しかし、当方ではこのように改変させていただきますのでご了承ください。

第3話：灯る炎

紅蓮邸には武道場があり、そこでは無現鬼道流を教えている。木目調の美しい道場は何年も使い込まれた証に、ワックスを塗っていないのにも関わらず、床は光沢を放っていた。そこに、武道着を着た紅蓮と一貴がいた。

「殿下の護衛は月詠が？」

今日は体を動かすために来た一貴だが、先日、喧嘩別れ？と言っただろうか。

とにかく護衛の件でもめて以来、今日会うのが初めてである。

「ああ、そうだ。」

そんな問いに少し眉をひそめながらも答える紅蓮。

「二人は姉妹ですし、殿下の妹君はマナという事ですね？」

「…。」

「まだそれを言うか。」

一貴には風習によって分けられた二人を自分の過去に照らし合わせているところがある。

「妹君には変わりありません。」

「たとえ御剣の姓になろうとも。」

「お前は赤の斯衛としてどうするつもりだ？」

まさか、その責務を放棄するとは言わないだろうな。」

まさか、そう思いつつも天木家の人間は突拍子のないことをするた
め一様聞いた、

「いえ、煌武院家には護衛をすると伝えてあります。」

「どういうことか。」

「2人を同時に護衛することは出来ない。

それに月詠とは違って、私には天木グループあります。

しかも、私は崇宰家の”鬼”。

いずれにせよ表立った護衛など出来ぬのです。」

感慨深くうなづく紅蓮。

「ですが…おじさん。

私も日本人であり、赤の斯衛です。

さすれば微力ながらも、と煌武院家にお伝えしました。」

「ならば?」

「はい、」

息を飲み、彼の答えを待つ。

「解答は…屋敷内で殿下の執事でござりますッ!…」

「!？」

なにを言っているのだこやつは？

執事…確かに問題は無い。

しかし、何か不吉な予感しかしない。

なぜ満面の笑みなのか？

「執事でございますッ!!」

2度繰り返しさらなる笑み。

「いや…あのだな…」

「私の研究資材も持ち込んで良いとお言葉。

不肖、天木一貴、煌武院家に一生ついて行く所存でございますッ

!!」

いいのか？これで？

しかも、研究資材だと？

大丈夫なのか？

「!」

「御剣家はどのようにするつもりなのだ？」

そう、彼の拘りである妹の存在はどうするつもりなのか。

本来、聞く必要のないことを紅蓮は聞いてしまった。

一貴は待っていましたと言わんばかりの顔をした。

「おじさ〜ん。貴方も人が悪い。」

御剣…、冥夜様の武術は貴方が担当する事になっているそうじゃないですかあ〜。

そ・し・て、無現鬼道流、この道場の”住み込みの”門下生となるッ！

と、なればッ！」

立ち上がりながら、大きく息を吸い込み…

「私が師範代になればイイツー！！」

「な、なにー……ッ！」

まさかの発言、そして情報が漏れていた事に本気で驚いている紅蓮…。

「フツハツハツハツハツ！！私に死角などないッ！！

さあ、おじさんッ！今すぐ稽古をッ！」

ファイトポーズをとり、僅かに体を揺らし臨戦態勢をとる。

「…」

無言で立ち上がり、鼻息を荒くする紅蓮。

「そう簡単に無現鬼道流を体得出来るはずが無かるうッ！

この小童がッ！」

クワッ！と目が開かれる。

「フフ・・・この時を待っていたのだ。」

はあ~~~~~

丹田に力を込め、空気が震え始める。

「宇宙乃雷イイイイイイイイッ！！！」

紅蓮の尖った髪の毛からレーザーが放たれたッ！

初めて人体から発せられる光線に一貴は対抗する術もないッ！

「ひでぶっ！！！」

一貴は何とも言えない声を上げて、天井ごと吹き飛ばされてしまった。

明るく広い格納庫には、忙しく動く整備兵と機械が大きな音をあげながら作業をしている。

「今ナニカの断末魔が聞こえたような……」

そんな中、内海はふと思い出したように呟く。

「気のせいですよ、内海。」

それに軽く答えるトリファ。

ここは南極にある秘密基地。

「まあでも、このコダールってのはとんでもねえ性能だな。」

目の前に佇む白銀に輝く機体は、Plan1056 コダール。そのフォルムは中世ヨーロッパの騎士そのものであり、特徴的なのは頭部のポニーテールである。

これは聖槍十三騎士団の大隊長である三人しか乗れない機体で、内海と榊は今初めて機体の性能を間近で見せてもらった後だった。

「しかし、問題なのはオムニ・スフィア高速連鎖炉の冷却機能、及び、パイロットなのです。」

「ふむ…。」

オムニ・スフィア高速連鎖炉、通称ラムダドライバ、別名、虚弦斥力場生成システムと呼ばれている。

細かい説明は省くが、簡単に言うとパイロットがイメージした内容が現実世界で起こせるというものだ。

例えば、敵の戦術機が一機いたとして、その機体が空気によって圧縮される、というイメージをパイロットがすればペシャンコになる。

このシステムを使用するためには膨大な電力と、それを操るための搭乗者の集中力が必要とされる。

コダールから一人の長髪、赤毛の少女が降りてきて彼らにナチス式敬礼した。

彼女の瞳孔は開ききっており、興奮した面持ちで名を名乗った。

「Siege Heil!

聖槍十三騎士団黒円卓第九位、大隊長、エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ・ザミエル・ツェンタウア。

階級は少佐でありますッ！」

彼女の戦いはすさまじかった。

相手がリモートの戦術機F-4だったとはいえ、三個小隊（12機）を僅か30秒で壊滅させてしまうものであり、流石の榊も開いた口が塞がらなかった。

だが、それも無理はない。

場面はT字路中央で1個小隊が弾幕を張り、その曲がり角で、2個小隊がビルを盾にし援護。

悪くない配置で、敵の接近を許さない布陣だった。

通常このような状況に合った場合、こちら側もビルなどの障害物に身を隠し、適度な応戦を行い膠着状態となる。

しかし、彼女は跳躍ユニットが無いのにもかかわらず、敵に突っ込みジャンプした。

確かに、コダールの運動性能は良く、通常の戦術機にはあり得ない

スピードで走ることが出来る。

コダール、最高”自走”速度300km/h。最大作戦行動時間100時間。

F-4は跳躍ユニットを”付けた”状態で最高飛行速度400km/h。最大作戦行動時間1〜2時間。

単純に性能だけを見れば第1世代、第2世代：そのようなレベルではない。

しかも、コダールは電磁迷彩システム、通称、不可視モードが可能である。

電磁波全般を欺瞞するステルス、そして存在そのものを目で探知出来ない”熱光学迷彩”。

世界最強の陸戦兵器と言っても過言ではない。

：だからといって、毎分1200発の36mm砲弾に突撃するのは無謀である。

研究者である内海でもこの行為が理解でき、期待はずれ、と言わんばかりにため息をつきモニターから目を外そうとした瞬間、思いもよらないことが起きた。

彼女に向かって発射された弾丸、そのことごとくが機体の1m先で”溶けて”しまうのである。

そして、見えない膜の様なものがこの機体を包み込んでいるように溶けたそれは後方へ流れていく。

中央にいた小隊は突っ込んでくる彼女を回避しようと上昇しようと試みるが、すでに遅かった。

コダールは手にしていた2丁の高周波ガンブレードをドッキングさせ、両刀長巻のような形になったそれをマニピレーター上で高速回転し、敵に振り投げた。

高速で回転していくそれは、次第に火を放ち始め、”炎の鎌鼬”が4機諸共、飲み込み消滅。

それと同時に、二個小隊の間に降り立つと、双方に手を広げた。

敵は銃口をコダールに向ける猶予も貰えず、高熱の鉄板に水滴が落ちた音と一緒に、その場から消え去っていた。

こうして、計12機の戦術機は約30秒の間に跡形もなく消滅させられてしまった。

たった1機の、そして”8歳”少女に…。

「…んんッ！」

内海と榊は、まさか少女が乗っていたとは知らず惚けていた。

それにトリファは、無理もない、と思いつつも話を始めるために咳払いをした。

我を戻した二人はお互いを見合わせ苦笑いをした。

「少佐、彼らは閣下の部下でいらっしやる、内海専務と、榊専務です。」

粗相の無いようお願いしますね。」

二人はねぎらいの言葉と共に手を差し出し、少佐と握手した。エレオノーレはその後、キヨロキヨロ辺りを見渡し始める。

「あの…」

餌を待っている子犬のような瞳でトリファに問いかける。

彼は知っていた。

まだ見ぬ我らの主に会えると思っていたことを。しかし、残念ながら彼はここにいない。

「すみませんが、閣下は…」

途中までしか言っていないが、彼女の顔が見る見るうちに沈んでいく。

そんな顔をしたら何も言えなくなってしまふ。

「嬢ちゃんは一貴に会いたいのか？」

榊はその状況をくみ取ったのか助け船を出した。

その言葉を聞くと花が咲いたように明るい顔になるエレオノーレ。

「はいッ！」

Kazuki、カズキ、かずき…

一貴様というのですね、我が主はッ！

会わせていただけるのですか？」

飲み込むように彼の名前を呟き、榊の前に詰め寄る。

「お、おい…そんなにがつつくな。」

「あつ！す、すみません！」

後ろに戻り俯きつつ、モジモジと体を動かせて、あのっ…そのっ…と呟いている。

ここにいる整備兵、そしてこの男、三人も顔を赤くしている。

「そう、うん、そうだね。

こんなにすごいのを見せてもらったんだから、ご褒美に日本への旅行ってどうかな

トリファさん

内海は自分を納得させるように言い聞かせた後、大声で提案した。

「で、でも…私にはコダールのテストとか、実験がいろいろあるの
で…」

チラッチラツとトリファを見る。

ここにある全ての視線がトリファに集まる。

「な、何ですか…！」

まるで私が悪いみたいじゃないですかっ…！」

慌てて抗議するが、整備兵は視線をずらす。

彼が顔を移すたびに、視線をずらす。

「くあ~~~~~！！

もっつ！仕方ありません！

1週間の休暇としますっ…！」

バツと少女がトリファに抱きつく。

「ありがとうっ！神父様！！

だ~~~~~い好きっ！！！！」

整備兵はわざと聞こえるように舌打ちをする。

どう転んでもトリファに味方は現れるはずのない事だった。

「それじゃあ、準備してきますッ！

Sieg Heil!

お疲れ様でした！」

トリファ、整備兵を含めた全員が顔を緩めて、格納庫を出て行くエレオノーレに手を振った。

黒いオーラを出しているリザがいることも知らずに…

第3話：灯る炎（後書き）

エレオノーレちゃん…

原作の雰囲気ゼロですね、今は。

今作のラムダドライバは魔法みたいなレベルの兵器です。
この位しないと人類の劣勢には到底…ね。

それでは。

第4話・執事たるもの(前書き)

どんどん壊れてくよ…。

第4話：執事たるもの

深夜0時。

帝都を照らす満月は戦時中だと忘れさせてくれる、妙な包容力がある。

そんな中、陽気に煌武院家の敷地内を闊歩しているのは誰か…
それは天木一貴である。

殿下の御前に近いのにも関わらずこのような態度をとるのはこの国で、彼だけでは無かるうか？

「ぬふつ、ぬふふふ…」

不意ににやけ、笑い出す彼。

一体何を考えているのだろうか？

煌武院家に仕える女中は一貴を、彼の自室に案内しつつも考える。

一貴様はこの家で執事になる、と言っても有名な武家。
それを蔑ろにすることは切腹に値する。

しかし、彼の素行というと、武家のそれではない。

やはり天木家の人間。

いくら養子といえど、我々の物差しでは測れないのだろうか。

「天木様、こちらでございます。」

彼に宛がわれた部屋は非常に広く、なにやらいかかわしい機材が多数運び込まれていた。

つい1週間前、彼のために受変電設備が新築され、さらにエアロッ

クで隔離された実験室、大型の演算機器数台、そして科学物質まで納入されており、執事ならざる破格の対応をされている。天木一貴、あの天木グループの社長であり会長。この待遇が普通…なのか？

「うむ。ご苦労。」

ほお、私の資材が全て持ち込まれてるとはッ！

うう…閣下、不肖、天木一貴、閣下に一生ついて行く所存でございますればッ！」

一貴…様は、部屋に入って周りを見ると、泣いた。

あの奥の透明なフィルムに囲まれた一室と、機材のマーク…あれはっ！！ BIOHAZARDマークと放射性標識ッ！！大丈夫なのか！？殿下の御身は！？

こちらの心配など意に介さず彼は自室を探索している。

「執事服とはこれか？これなのか？

ナイスッ！ナイスすぎるぞおお！」

服を見つけたかと思えば雄叫びを上げ、服を上へ投げる。

「はぁッ！変・身ッ！とお~~~~ッ！」

な、にッ！

視界が光で遮られるッ！

「ふんッ！」

なんとということだ…

一瞬で服を着替えるとは…

「お帰りなさいませお嬢様。

お食事になさいますか？お風呂になさいますか？」

しかも完璧なたたずまい…これが天性の才能ツ…そしてあの眼差し…
女中の体は、ブルツ、っと震える。

私を踏んでツ！蔑んでツ！一貴様ツ！！

「それともこの俺かい？」

指ぬきグローブから見えるか見えないかの細い鋼線を出しながら女
中を睨む一貴。

彼女は後ずさり、扉に背中が当たったかと思うとその場へたり込
んでしまい、なにやら悶えている。

「ハアハア…ウウ…、もっと…もっと…罵ってくださいまし…
一貴様…」

「？」

一貴は状況を掴んでいないのか、口を三角にし、首をかしげた。

「何をやっているのかね？」

…まあ良い。ご苦労であった。」

おもむろに懐中時計を取り出し呟く。

「おお！もうこんな時間か！

殿下の元へ御挨拶に向かわなければツ！ユウヒたああああん
ツ！！」

女中の事など完全に無視し、一人全速力で走り出す。

「ハ…アツ…、こ、これが放置プレイツ…、ウツ」

……。

「一貴殿はまだこんのか…

全く…、殿下…あ奴は変人ですからお気を付けくださいねえ。」

「だいたい〜」

夜2時、月詠マヤは目の下にクマをつくり殿下をあやしている。

正直、彼女は限界だった。

毎夜毎夜泣かれては起きてあやし、朝は学校である。

殿下がお生まれになって早、4ヶ月。
お世話をさせて頂いて3ヶ月目、一貴が来ると聞いてどれほど嬉しかったか。

この日を待つて頑張つて来たのだ…
そしてマナを出し抜い…

「い、痛い、髪を引っ張らないでくださいまし、殿下」

「きゃーおん！だぶだぶッ！」

物思いに耽っていたマヤを叱るように髪を引っ張る殿下。
子供は皆かまってほしいのだ。

そんなことをしていると突然ドアが開かれた。

「おおっ！殿下あ！」

両手をいっぱい開き、迫ってくる執事服の男。
何とも言えぬ艶めかしい表情をし、若干乱れているネクタイとYシヤツからは鎖骨が見えている。

殿下の御前でこの様な醜態を晒すのは誰だッ！！

膝を付き頭をたれる執事。

殿下は、ほけ〜と状況を理解していないようだった。

「殿下、お初にお目にかかります。

私、今日から殿下のお世話役を賜りました、執事の天木一貴と申します。」

なんと！一貴と言ったか！？
髪を切ったのか？

「以後よろしくお願いします、殿下。」

ニコッ

破壊力のある笑みをし私までも籠絡される勢이었다。
…？私までも？

「おお、だッ！だッ！」

あッ！貴様、殿下をたぶらかしたなッ！

「殿下、駄目です。」

そんな奴のところへ行ってしまわれてはッ！」

「だいつ！」

マヤが止めるのを拒否するよつに飛び移る。

そして、一貴は慣れた手つきで殿下をおんぶした。
すると、殿下に見えないようにニヤリッと笑った。

「殿下は感性の高いお方のようなだ。」

本能的に”優しい”私に懐くのは道理でしょうね。」

「クッ！き、貴様あゝゝゝ！」

「おお、怖い怖い、ねえゝ殿下。」

先ほどのあくどい笑みを変えて、同意するように殿下を誘導する。

「だあ〜！」

肯定してしまう殿下。

クソッ！なんて奴だ！

手を床に付き頂垂れるマヤ。

「さあ殿下、私たちは行きましようか！

マヤはゆっくり休んでな。」

「！？」

ゆっくりと扉を閉め出て行く一貴…。

やっぱりお前は…。

マヤは彼の心遣いに感謝し、寝床に付くのであった。

「それでは殿下ッ！」

自室に着くなり、殿下を机の上に座らせ声を上げる。

「だ!?!」

「私の事は”兄様”とお呼びくださいッ!」

「だ?」

何いってんだこいつ、という目つきをする殿下。

「に・い・さ・まッ!」

しかし、一貴はめげない。

手で拍子を付けて表現する。

「に、にい?」

きこちないながらも一貴の言うことを真似しよつとする。

「おお〜!流石は殿下、物覚えが素晴らしい!」

殿下の頭をわしゃわしゃと撫でる一貴。

それを殿下は嬉しそうに受けている。

味を占めたのか一息入れ、また殿下は言う。

「に〜に。」

「……!」

「瞬間まってしまった。」

「で、殿下あああああああー！」

その破壊力に耐えられる者などいない。

こうして、殿下と一貴の夜は過ぎていくのであった。

第4話：執事たるもの（後書き）

少年ウォルター見参ッ！！

あの顔で変なこと言ってると思うとシニールですね。
後ろ髪切っちゃいました。

女中…どうしてこうなった…

可愛い子供に”お兄さん”なんて呼ばれたらあめ玉でも何でもあげ
ちゃいます。

遊園地？

いいぞおゝ何時でも連れてってやる。

ん？実の妹はどうかって？

ああゝ何か違うんだよね、やっぱ。
性別関係なく0ゝ3歳はカワイイ。

そんなわけで、

ユウヒたああああんツ！！

でも椰子なごみ、みたいな子最高。

リアルにいないかなあ？

ただし、ファザコンは勘弁。

しかも、リアルでのツンデレはヒステリー率高すぎ。

無理でしょ。

まあ、だからこそゲームキャラなのですが。

それでは。

第5話・Mad scientist(前書き)

ドリフの盆回りって良い曲ですよね。
テンションあがります。

第5話：Mad scientist

月詠両姉妹は朝礼前に教室の奥で話し合っていた。

会話の内容は公園で見かける若奥様の「我が子の成長談話」そのものだ。

特に妹のマヤの方は終始笑顔で、まるで我が子のように、冥夜様が、冥夜様がと自慢話をしてくる。

しかし、それと対照的なのは姉のマナである。

数分、数十分と話していく内にマナの眉間は険しくなっていく、話の内容は耳に入っていないようだった。

自分の思考がある程度まとまったのか、ボソツ、と言葉を漏らすマナ。

「おかしい…」

「なにがおかしいの、マナ？」

先ほどまで気持ちよく話していたマヤは自分の言葉が変わったのか、と言う意味で聞き直した。

「い、いや、何でもない。」

しかし、マナの考えは妹にバレてはならない。故にとりあえず否定しておくことにする。

「そっ?」「

マヤは大して気にすることもなく話を続けようとした。しかし、時間がそれを許してくれなかった。

時計を見たマナは席に着きましよう、と妹を誘導し、自問自答という思考の海に一人飛び込むのであった。

『マヤの話によれば冥夜様は、あー、うー、としかお言葉しか発せられないと聞く。

だが、悠陽様はどうだ？』

『…カタコトながらお話なさる。

しかも、すでに伝い歩きまでなさっている…。』

『生後5ヶ月、生後”5ヶ月”だぞ！？

ありえん。あり得なさすぎる。』

『それに初めに覚えられたお言葉は「にいちゃ！」。

お母様でも、お父様でもなく、「にいちゃ！」「』

『…これは絶対に一貴が何かやらかしているに違いない。否。

完璧にやっている。』

確証にも似た、既知の念が頭をよぎりマヤは頭痛がした。

一貴の普段の行動を見れば、あるある、思い当たる節が大いにある。

例として殿下の母上がご病気で、母乳が与えられなくなったとき、母乳の選定がなされた。

このとき一貴は思いもよらぬ行動に出る。

全ての乳母と目される人物の母乳を採取し検査した。

その結果に満足しなかったのか奇声を上げ、決定を下そうとした元枢府に猛抗議した。

「駄目駄目！」

これじゃあ悠陽たん…もとい、悠陽様の体質に合っていない！」

ものすごい剣幕での抗議だったと噂では流れているが、真偽のほどはわからない。

そもそも赤の斯衛である彼にそんな力はなく、元枢府に楯突いたとなると大問題になるのが常識である。

元枢府と言えば殿下の補佐、つまりは摂政の役割をしている組織であり、殿下そのものと言っても過言ではない。

だが、天木家の人間であるが故にそれが許されたのか…はたまた、別の理由があるのか…その点もわかっていない。

しかし、楯突いたことは事実なのだろう。

一貴は粉ミルクを”自作”し、殿下に与え始めた。

「栄養満点、滋養強壮」

これは一貴が殿下にミルクを与える時に呟く呪文の様なものだ。だからといってこれは嘘ではない。

栄養満点、滋養強壮：

これを研究機関に提出したときには大騒ぎになった。

それは殿下の母上の母乳の成分に酷似しているだけでなく、栄養価が日本の平均乳幼児に与えられる量より倍近く、しかも、抗体や免疫力を高める作用がある核酸類が適正量よりも少し多めに設定されていた。

もはやオーダーメイドされた殿下専用の適正かつ、理想的なミルクであった。

これは天木グループによって若干汎用性を持たせて民生化されたのだが、これのせいで一体何社の粉ミルク会社が倒産したことか…。

そして当然、研究者はどのようにしてこのような理想的な物が作れるのかと興味津々であったが、

「こんなこともあろうかとッ！」

と連呼する一貴から情報が聞き出せたとは到底思えない。

…こんな事をしでかすような人物が、信用できるのか。

確かに忠誠度で言えば信用できるのだろう。

しかし、度が過ぎている。

西洋の言葉を借りれば”Mad scientist”この言葉が合う人物だ。

深く潜ってしまったせいかマナの顔色が悪い。
それを心配した担任が注意を促し、彼女は生まれて初めて早退する
のであった。

「殿下！今日も特訓のお時間がやって参りましたッ！」

どんどんぱふぱふ

一貴の部屋は殿下一人が可愛らしい椅子に腰掛けている。
そんな中、テンション高く動き回っている彼。

そして彼の意識に呼応するかのようになる、謎のちんまりした人形
集団。

ハッキリ言って才能の無駄遣いである。

「おお〜！にいちゃ！にいちゃ！」

無垢な殿下に罪はない。

彼女は純粹。

あるがままを受け入れるしか術はないのだ。
そんな彼女につけ込んで、あること無いこと吹き込んでいくのが彼の仕事である…。

「殿下あゝ、にいちゃま！ではありません。

に・い・さ・ま！

それ、に・い・さ・ま！」

今日も始まる自己流の特訓。

最初は必ず、自らの名称に対する刷り込みである。

「に・い・ちゃ・ま、にいちゃま。」

「おおゝ、流石でございますね。」

一貫の望むような解答が出た場合、頭を撫で、子供の喜ぶ事をする。報酬系の悪用、これは悪質な洗脳に近い。

「いゝゝ、にいちゃま、にいちゃま！」

「はいッ！前振りが終わりましたので、次のお題！」

ででえゝん

どのような仕組みで作動しているのか、先の人形の目から光が出され、空中にテロップが浮かび上がる。

「最強！皇帝計画第28号3回目ッ！」

『世界の偉人を通して、演説うまくなるっ！〜ドイツ編〜』

さあさあ、殿下、これをズボツとかぶってお勉強なさってください

いね。」

いつの間にか準備されていた、顔全体を包み込むヘッドマウントディスプレイを殿下にそっとかぶせる。

> Der sechste Partitag der Bewegung geht zu Ende.
Was fuer Millionen Deutsche die ausserhalb unserer<<

若干音漏れがしていたため音量を調節する。

「フム…。」

適正と思われる音量にし、殿下の周囲を片付けた。

その後、自分のデスクに歩みを進め、おもむろに引き出しを開ける。

中には悪趣味にも、大量の形状の違うナイフと、拳銃が一丁がしまわれていた。

その内のお気に入りの小型ナイフ5、6本と拳銃を手にする一貴。

それと同時に、目で捉えることの出来ない速度でナイフを投げ、彼の姿も消えた。

一瞬の刹那。

壁には赤髪の少女が足を振るわせ、つま先で立っていた。
いや、立たされていた。

一本のナイフはあらぬ方向に刺さっていたが、そこにはたたき割られた液晶画面の様な模様になってしまった一枚の布があった。他のナイフはその少女の、首、両手首を拘束するように刺さっている。

一貴はその女の口の中に銃口を押し込み、問うた。

「どこの誰だか知らんが、ノックもせずに忍び込むのは礼を失すると思うのだが？」

「うぐ…」

彼女の目からは恐怖しか読み取れない。

「名を名乗れ小娘。」

「っ…」

銃口を口に入れられているのだから答えられるはずもない。だが、そんなことは彼は百も承知である。銃口を入れたのは自殺防止である。

服装から見るに、例の組織であろうがそんなことは関係ない。威圧感を与え、銃をさらに押しつけ再度問う。

「名を名乗れ。」

「っ…」

窒息しかかっているがそんな事は気にしない。
とはいえこのままでは埒があかない。

仕方なくゆっくりと後ろに下がり、銃を引き抜き、代わりに頭に照準を合わせた。

女は咳き込み息を整える。

そして、息をめいっばい吸い込み答えた。

「はッ！ Sieg Heil！ Viktoria！

申し訳ございませんでした閣下ッ！

聖槍十三騎士団黒円卓第九位、大隊長、エレオノーレ・フォン・
ヴィッテンブルグ・ザミエル・ツェンタウアッ！

階級は少佐でありますッ！」

洗練された見事な敬礼だった。

フォン…貴族なのか？と疑問に思ったが口にせず次の質問に移った。

「何故、無断で入室した？

場合によっては…」

言葉を最後まで言う前に、近くにあった電話が鳴った。

こんな時に…と思いつつも若干苛つくように、銃口をそらさないように注意しながら、受話器を取る。

「誰か。

…。それが？…。ああ。」

途中まで話をしていると一貴の目は大きく開かれた。

そして銃を下ろしセーフティを入れ、机にもたれかかって、話を続ける。

「じゃあ彼女は？」

あゝ。そうゆうワケね。了解、了解。

内海は縛り上げて良いから。

うんうん。はいはい。

黒崎君、お疲れ様。ありがとう。」

内容は極めて簡単。

内海が”しでかした”のだ。

彼女の功勞のご褒美と称して一貴の場所を彼女にこっそりと告げたのである。

そして、

「閣下はねえ、驚かされるのが好きなんだよ」

とか何とか吹き込んでそそのかしたらしい。

その現場を目撃していた天木商会の社員の一人が黒崎に密告したのである。

最初は冗談かと思っていたらしいが、『天木重工業製全天候型1984（式）熱光学迷彩「隠れ蓑」』が無断で1枚持ち出されていた事が発覚し、事に及んだそうだ。

「隠れ蓑」は極秘生産されている特殊兵器であって、その名称自体秘匿されている。

そしてこれは聖槍十三騎士団と関わる一部の人間しか知らぬ重要物資。

それを持ち出すことの出来る人間…。

内海と来日したエレオノーレしか思い当たらない。

その事に同情したのか一貴は頭を片手で抱えつつ、口調は柔らかく
なつて彼女と話を再開する。

「えっと、エレオノーレさん、だっけ？」

「はッ！呼び捨てで構いませんッ！」

エレオノーレも気配を察したのか先ほどまでの青い顔ではなく、血
色は戻っていた。

「そんなに畏まらなくて良いから。」

歳は：あ、レディーに対して年齢を聞くのは失礼かな？」

あの憧れの閣下の御前で尊敬の態度をしない団員はいるだろうか？

「いいえッ！」

年齢は8歳でありますッ！」

変わらない態度で返答する彼女。
あきらめて、一貴は続ける。

「そうか、そうか。」

「ッ！8歳だとう！！」

「は、はいッ！」

何故年齢に反応したのか、一瞬戸惑った。

「俺より1つしか違うのか!？」

「閣下は9…歳でありますか？」

「ああ、そつだよ。」

ふん…、少々思案する一貴。

「そつかあ、年下かあ。」

そつかそつか、となにやら悟られないように、不吉な笑みをした彼は厳しい顔つきに戻り彼女の正面に立つ。

「…。貴様、無礼を働いた者の末路は知っているか？」

自分の主が前に立った事でエレオノーレは膝を付いた。忠誠を誓う騎士のように。

「はッ！トバルカインは自決いたしましたッ！」

それを言った後、彼女の顔色は再び青ざめていった。吐き気すら催した。

消される…彼女の頭の中はその言葉で一杯になってしまった。

「その通りだ。」

そう、貴様は私に無礼な行いをしたのだ。

代償はいかほどに？」

一貴はニタニタと、弱者をいたぶるように言葉を発する。すると彼女はガタガタと小刻みに震え始めた。

「お望みのままに…」

覚悟したような、かすれた声で考えを述べた。
下に敷かれていた赤いカーペットはエレオノーレの冷や汗がしたたり落ち、丸いシミがではじめている。

「ほお、貴様は自分の末路を私に預けるか。
結構結構。」

心ないテンポの遅い拍手をする彼。
そして彼女を断罪するかのように手を挙げた。

「それでは、エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ＝ザミエル・
ツェンタウア。

貴様に判決を申し果たす。」

空気が重くなつた。
彼女の頭の中は走馬灯状態で、その言葉を聞いた瞬間目を強くつむつた。

「私を”お兄様”と呼べッ！」

何を言い始めた？

「は？」

思わず聞き直してしまう、エレオノーレ。

「だ〜から、お・に・い・さ・ま！」

先ほど殿下にしていた様な優しい笑みで、手でリズムを取りながら主張する。

「え、ええと…」

その、お、おにいさま…」

顔を赤らめながら律儀に答える彼女。

「Sehr guuuut！」

さらに、私…いや、俺に対しては丁寧語をつかわんでよろしいッ
「！」

一人でテンションが爆上がりし、鼻息が荒くなっている。

「し、しかし…それでは私の刑罰になっておりません…」

と、彼女言っているが実は満更でも無かったりする。

ここに来る前に、お兄様みたいな存在だったらなあ〜、と夢を見て
”お兄様”という言葉を実習してきた彼女だ。

「ええい！何を言っているんだエレオノーレちゃん、否ッ、妹よッ！
自分の末路を預けたくせに、今更…」

口を尖らせて抗議する。

「そ、そうは申しましたが…」

本当はそう呼びたい彼女は思わず立ち上がる。
しかし、心とは反対のことをいつてしまう。

「ほおら、ドンと胸に飛び込んでこいッ!」

そんな心を察知しているのか、一貴は自分の胸をたたき抱擁する体制を取っている。

まるで、全ての罪を許すかのような…

「で、では。」

「お、おにいさま…」

描いていた事が現実になり、先ほどまでのシリアスな状況は完全に抜け落ち、エレオノーレは一貴の胸に飛び込んだ。

そして一貴はそつと頭を撫で、すまなかつたな、と声をかけた。

エレオノーレの耳は真っ赤に染まり、鼓動が一貴まで届いていた。

そのッ…あのッ…と少し戸惑っているのがまた可愛らし…

『バンッ!』

銃声のように大きく開かれたドアはヒンジが所タイカレてしまつて

いる。

…そこが問題なのではない。

何故この時間、朝の10時にマナが帰っているのかである。

コトコトコト...

大地が揺れている、マナの怒りを受けて。

「貴様是谁だ、名を名乗れ小娘。」

第5話・Mad scientist（後書き）

お後がよろしいようでッ！

見事にブーメランですね、これ。
全ては一貴が悪いのです。

ちょっと嬉しいことがあって大幅加筆。
長かったですね、如何でしたか？

それでは。

第6話：後藤さんの古傷（前書き）

パトレイバー、後藤警部補が拷問紛いの事をされます。

後藤さん、ごめんなさい。

彼のキャラは大好きなのですが、こうなってしまいました。
本当にすみません。

あと、先ほど申し上げましたが、拷問：“サディスティク”な描写
があります。

注意してください。

と言ってもそこまで多いわけではありませんが。

第6話：後藤さんの古傷

「ついに出来たか。」

天木家が所有する試験場にF-15Cが2機佇んでいる。

F-15C。

最近米軍で採用された第2世代型戦術機。

その性能はこの先”最強の第2世代”と呼ばれるに値するものである。

これを目の当たりにすれば、日本の技術者は閉口せざる得ない。

先日これを一旦バラした榊専務も、やはり…、と呟やいた。

彼の憶測は間違っていないかった。

この技術差を埋めるためには、日本は、この機体を輸入し無ければ第3世代など夢のまた夢であると実感した。

しかし、何を言っても上層部は聞く耳を持たない。

もう我々は米国と同等、などという風潮が主流となってしまうたらだ。

そして、彼は次期主力機の国産開発（耀光計画）から脱退した。

巖谷榮二大尉に全てを托して。

この機体F-15Cは本来であれば、米国の最重要機密にあたるものである。

しかし、これもまた重三郎がらみで解決する。

チャールズ・ウィロビー元米陸軍少将、彼に密輸して貰ったものである。

彼は戦後、GHQで「赤狩りのウィロビー」と呼ばれるほどに猛烈な反共主義者として有名だった。

そして、彼がドイツ人とのハーフ、そして旧名は「アドルフ」であったせいかナチスを信仰しており、重三郎に対して異常なまでの敬意を払っていた。

これが幸いし、天木家は戦後の米軍支配の影響が最も少ない人物、会社となれた。

F-15Cに手を当て整備員と話をする一貴。

「ええ、テストは完了していますが、パイロットデータの登録を終えています。」

それにこの機体は”あれら”を搭載していますので、今のところ社長のワンオフです。」

「試験機だからな。」彼女”の調子は？」

「いつでも構わないそうです。」

そうか…と続け彼はその機体に乗る込む。

”アーム・スレイブ”通称”AS”

聖槍十三騎士団の所有する戦術機の原型にして、オリジナル。その性能は戦術機の10倍、100倍とされ、ラムダ・ドライバを積んだ最新鋭ASコダールは、オーバーヒートの問題、そして、パイロット不足を解決出来れば人類の劣勢は一瞬で解決出来る。

しかし、彼らの主力戦力であるM9ガンズパックD、E系列、つまり第3世代ASでさえ”機体が”乗り手を選ぶ。

これは第2世代ASに無かった機能である”AI”のせいである。第3世代ASの大きな相違点はサーミオニック発電にあり、これによって強力な能力得る結果になった。

だが、これを積むに当たって”AI”を乗せないと機体が動かないのである。

原因は不明。

なぜなら、聖槍十三騎士団の技術というのは、ウイスパードと呼ばれる者達が”聞こえてきた声”を頼りに開発しており、理論体系はほとんど整っていない。

そのような理由もあって、技術は世界に公開できない。

だが、天木一貴らの登場によりその点が徐々に解決しつつある。

それが今回の試験機である。

現時点で世界最新鋭のF-15Cを彼らの手で改造し、フィードバック出来るか試すのだ。

戦術機とは違うパイロットルーム。サブジェネレーターに火を入れ

る。
体を僅かに震わす心地良い感触が全身に伝わり、網膜に文字が浮かび上がる。

- Zephyr Phantom System Mk ? ve
r 5.7 Reon -

そして音声が入ヘッドセットに流れ込む。

『 boot ok . . .
system combat type xl standby .
. . .
request passcode . . . 』

機械的な声が耳に響く。

「Hello, Reon」

レオンそれが”彼女”、この機体のAIだ。

以前、動態保存されていたゼファー、そのシステムを抽出し完全自立型無人機システム実証試験機から、補助AIとして変貌したのだ。

『 音声認証コード一致いたしました。』

EX - 05 - U メインジェネレーター起動します。

お久しぶりですマスター。』

一貫の声を認識すると、先ほどの声とは打って変わり女性的で人間的な声に変わる。

そして、先ほどとは違った本格的な振動が全体を揺らしたかと思えば、直ぐに無音状態となる。

「調子はどうだ？」

「システムオールグリーン、問題ありません。

それよりも、マスター？」

顔の湿布や、絆創膏は何でしょうか？

解答を求めます。」

冷や汗をかく一貴。

それもそのはず、このAIは一種の感情を持ち合わせている。

「い、いや、何でもない。

とある…そう、事故に巻き込まれたただけだ。」

事故…確かにあれは事故だ。

「それは…大事に至っておらず安心しました。」

「そ、そうだな、あは、あははははッ！」

引っ掻き傷が多い事はあえて追求しない方が吉である。
男女のもつれは深いのだ。

「本当に大丈夫ですか？

心拍数が増大しています。」

「大丈夫だッ！」

半ば自棄になって答える。

そこに助け船として無線が入る。

>>坊主、そろそろ始めて良いか？<<

「う、すまない。始めてくれ。」

>>よし、今日は軽い運動だ。適度にやってくれ。<<

これは実験激しい運動は勘弁だ、という榊の心が透けて見えた。

「了解」

短く答えた一貴は試験場をかけていく…。

一貴と内海だけが研究室に入りデータを確認していた。

「ぼくも、これを待っていたんだッ！

この性能、このスペックッ！

くう~~~~~!!

「これが大量生産された暁にはッ！」

テストが終わりそのデータを見ながら内海は感情が激しくなっていた。

「待て、内海。

大量生産は出来んぞ？」

その姿を見ながら一貴はため息を抑えつつ、内海に話をする。

「は？何を言っているんですか、会長？」

何を言っているらしいや？と言った具合に首をひねって返事をする内海。

「お前も見ていただろう？」

レオンは複数機体に対して認識が無い。

シミュレーションを何度繰り返しても同じ結果だ。」

以前のゼファーと同じく同じOS…AIを乗せると暴走状態になってしまうのだ。

「ええ。それは理解していますが。」

「それに、私のデータを登録したと同時に、私以外の操作は一切受け付けない。

そして何よりも”自我”が目覚め始めてしまっている…。」

我々が必要としているのは補助システムであり、兵器なのだ。

それが感情を持ってしまっただけは何の意味もなさない。」

兵器に求められるのは絶対的安全性、信頼性。それが”感情”などという人間的なものが入ってしまうのは危険である。

だが内海もそれは百も承知。

「そんなのは分かってますよ。」

だ・か・ら、レオンを改良して人間の代わりにさせるんですよ。」

つまり、人造人間を作りだそうとしているのである。

だが…

「それを実証しようとしてファントムシステムを創ったのは確かだ。しかし結果はどうだ？」

レオン…このAIは確かに優秀だ。

だが、我々を味方だとは認識しなくなってしまったではないか。」

その言葉にすら反撃しようとする内海。

「ですからあゝ」

一貫は渋い顔をしながら決断した。

「もうこの話は終わりだ。」

以後、ファントムシステムの開発は延期ではなく禁止する。

これ以上進化を遂げてしまつては第二のBETAになりかねん。」

「そうですか。」

一気にテンションが下がる内海。

顔は笑っているが目は笑っていない。

間の良いことに研究室に黒崎が入ってくる。

「失礼。」

天木会長、ウィロビー閣下が下にお見えです。」

「分かった。」

一貴が立ち上がり、開かれているドアに向かう途中、内海に向かい
言い放った。

「内海、後はレオンの観察のみだ。」

よろしく頼むぞ。」

黒崎の手によってドアが静かに閉められる。
そして、誰にも聞こえないように内海は呟いた。

「誰にも僕のおもちゃは渡さない…。」

「ウイロビ さんは暇なんすね〜」

「シゲえ！！」

「いたつ！

おやつさあん〜。」

頭をひっぱたかれる斯波繁男^{シバシゲオ}、通称シゲ。

天木グループの人間ではないが、榊専務の信用する彼の部下だ。

まあ、シゲの言うこともわからんでもない。

実際ウイロビ 閣下はこの戦時下にも関わらず”アカ”について長々と話をしていったのだから。

途中眠くなったのは秘密だ。

突然、鳴るはずのない通信機の受信音が倉庫内に響く。

「誰だツ！！」

この馬鹿野郎ツ！

精密機器の近くでは電源を切れと…ツ！

俺の前に連れてこいッ！！」

当然榊専務は怒鳴り散らす。

整備に携わる人間であればこのような事は御法度。

本当にあり得ない。

すると奥の物陰から小型の通信機を耳に当てた青年が、通信を続けながら近づいてきた。

「あ、松井さん？」

ちよつと今取り込み中。

え？

迎えに来てくれるの？

頼むわあ。」

見慣れた人間、少なくとも一貴には。

「お前は…警視庁の」

「はッ！」

警視庁”公安部外事一課”後藤喜一コトウキイチ 巡査部長であります。」

敬礼を決めた後、こちらを舐めたように公安であることを強調して名乗った。

公安部外事一課とは欧米、それも特に米国について調査している課である。

「何時からそこにいた？」

一貴は青筋を立てながら彼に問う。

「天木様の警備が減るといふ連絡をしに来たもので。」

しかし、話をそらす後藤。

「何時からそこに？」

再度問うた。

「まあ警備部の仕事なんですけど、僕、今日暇だったもので。」
しかし、これもかわされる。

「何時からいたと聞いているッ!！」

頂点に達した一貴は、榊の脇にあった銃を取り後藤との間合いを瞬で詰めた。

「おおっと。」

わざとらしく手をあげる後藤。
そしてニヤリと笑い、

「いくら天木様と言えども公務執行妨害です…よつとッ!！」

一貴の腕を掴みを投げた、

「僕はこれでも柔道を…」

かに見えた。

そう、彼の目の前には居るはずの一貴の姿が見あたらなかった。

そして上の方から銃声が響き、弾丸は後藤の耳元をかすめた。

「皇居等侵入罪の現行犯だ。」

「これ位されても文句は言えまい。」

一貴は後藤の斜め後ろに立っていた。

「やあ、警部さん」

先ほど撃つたのは内海である。
その銃声のした場所を見た後藤は叫んだ。

「お前はリチャード・王ツ！」

やはり、内海は有名人のようで、後藤は銃を取り出し迷い無く引き金を引く。

しかし、彼の銃からは、独特の発砲音は聞こえてこない。

そのかわり別の銃声が響き後藤はその場につづくまった。
腹部そして背中からも血が流れ出していた。

「さつさと処分しちゃいますかあ。」

ね 会長っ

人を撃つたのにも関わらず笑いながら対処しようとする内海。
それに対して一貴は乾いた笑いを飛ばした。

「ふっ、馬鹿な。」

貴様、後藤と言ったな。

食えん男だ。

先ほど松井とか言う男と連絡を取っていたな？」

うづくまっていた後藤を、つま先を使って仰向けにする。
そして、先ほどまで空気のように静かだった整備員達が、全てのサ
ーチライトを後藤に向けた。

「ぐっ……」

まぶしさと痛みには彼はくぐもった声と共に手で目を覆おうとするが、それも一貴が仁王立ちになる形で両手を足で押さえる。

「本来ならあれだが、増援がいてはな。

あと、これは」

屈んで、後藤の胸元のレコーダーを取り、

「処分させてもらう。」

と言って後ろへ投げた。

「警告しておこう、ここで見たことは口外せん方が君のためだ。

その松井君とやらにも伝えた方が良い。

それに我々は何一、法を犯していない。」

「山ほど犯しているじゃないかッ！」

最後の力を振り絞って声を上げる後藤。

しかし、これが彼を喜ばせる結果となってしまうた。

「まだ喋れるほど元気があるんだあ〜」

一貴が何とも言えない艶っぽい顔と、声になる。まるで少女のように。

中指と薬指をくっつけ、後藤の腹部の銃創に押し込んだ。後藤はたまらず叫び声を上げる。それにも関わらずニタニタと薄気味悪い笑みと共に、指を上下に動かす一貴。

彼の叫び声を楽しむかのようにいたぶった後、手を離し、指に付いた血を舐めながら後藤に声をかける。

「ふふふつ、おじさあ〜ん。

こつ言えばわかるかな？」

ゆっくりと焦らすように、耳元に近づく一貴。

「我死スルトモ自由ハ死セン」

周りにも聞こえない、吐息がかかるか、からないかの距離でいやらしく言葉をつなぐ。

「ッ！」

意識が朦朧としていたのにも関わらず目を見開いて驚く。

「ふ、ははははははッ！」

まあ、僕は死なないけどねえ〜」

そういつて、くるくると、後ろへ下がっていく一貴。

「貴様あッ！」

アメリカ
亜米利加のッ、ぐふッ」

手の拘束が解けた後藤は立ち上がり抗議の声を上げるが、後ろに控えていた内海に首を突かれ、気絶した。

「どうします？これ。」

「門の外にでも捨てておけ。」

松井とやらが迎えに来る。」

無表情に一貴は答えた。

指示を出し、後ろに下がっていくと榊が帽子を脱いで、一貴に声をかけた。

「坊主、大変なことになっちまったな…」

警備の不徹底だった。

申し訳ねえ。」

榊が頭を下げる。

それに一貴は笑顔で応えた。

「なあに、電話をかければチチンプイッ！、さ。」

…次は無いけど。」

ボソリと最後に呟いて。

「それじゃあ…。」

と咳払いをした後いつもの顔つき、口調に戻り皆に指示を出す。

「私は煌武院家へ戻る、何か会ったら連絡しろ。」

それと内海。」

後藤を担ぎながらニンマリと振り返った。

「はい」

「暫くお前はここを離れる。」

「。。」

了・解ッ！！」

一瞬、間が開いたが、理解し、何故か敬礼した。

後日、後藤巡查長は無事病院を退院した。
そして、上司に報告する。

「天木一貴は敵性分子である」と。

しかしこの報告は無かったこととされる。
なぜなら後藤巡査長はその場に”いなかった”のだから。

その時間帯、彼の所在は本庁にあった。

というのも彼は通常業務外で天木の試験場へ行っていた。

記録上では、本庁のオフィスで事務処理をしていたこととなっている。

故に報告できない、報告出来るはずがない。

だからといって後藤の腹部の弾痕は消えない。

だが、これもなぜか偶然、彼の所属する外事一課課長が職務中、つまり後藤が居たはずの場所で銃の暴発事故を起こしている事となっていた。

課長はこれを受け引責辞任。

そして、医師の鑑定により後藤は「外事一課に”極度”の不信感を持っている」と報告され、公安三課へ異動した。

事実上の”もみ消し”である。

そして公安三課。

右翼団体を捜査対象する課だ。

しかし、日本国内では戦後、右翼は殆ど存在していない。

ここは、なにか不祥事をおこし、かつ、諸々の事情で免職できない警官を集めている。

殆どは、いや、全ての人間は優秀過ぎてここへ来てしまう。

つまり、これは”左遷”を意味している。

それでも彼は諦めてはいない。

天木重三郎を始めとした天木一族はドイツのスパイという事で内偵は進んでいた。

しかし、天木一貴、そして天木グループはアメリカのスパイと思われる。後藤のターゲットとして、これから執拗に狙われ続けるのである。

松井、マツイタカヒロ松井孝弘巡査部長は、その点うまくいった様だがそれでも部署の異動はあった。

本来であれば警備部所属のエリートコースまっしぐらの予定で人事を動かされていたが、捜査第一課へと動かされた。だが、本人はむしろそれを喜んだ。

刑事らしくて良いと。

彼がその運命を呪うのはまだ先の話だった…。

この事件で後藤は三つ教訓を得た。

- 1、銃は持たない、銃を持った相手には逆らわない
- 2、自分の力は極力見せない
- 3、多くを味方につけること

しかし、この教訓は今殆ど生かされない。

これから始まるであろう大事件に使われるのである。

そしてこの日を境に彼の名は警察組織の至る所へ轟き始めるのである。

「カミソリ後藤」として。

第6話・後藤さんの古傷（後書き）

ロリカーーーーーードッ！！

サディステイク、ロリカーーーーードッ！！

それ以上は何も言えません。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268w/>

Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

2011年12月11日19時48分発行